

# 第1章 上田市の歴史的風致形成の背景

## 1. 自然的環境

### (1) 位置

上田市は長野県東部に位置し、北は長野市、千曲市、須坂市、坂城町、筑北村、西は松本市、青木村、東は嬬恋村（群馬県）、東御市、南は長和町、立科町と接している。県都の長野市までは約 40 km、また東京までは約 190 km、北陸新幹線で最短約 1 時間 20 分の距離にある。現在の市域は、上田盆地を中心に、東西約 31 km、南北約 37 km、面積 552 km<sup>2</sup>の広がりを持つ。



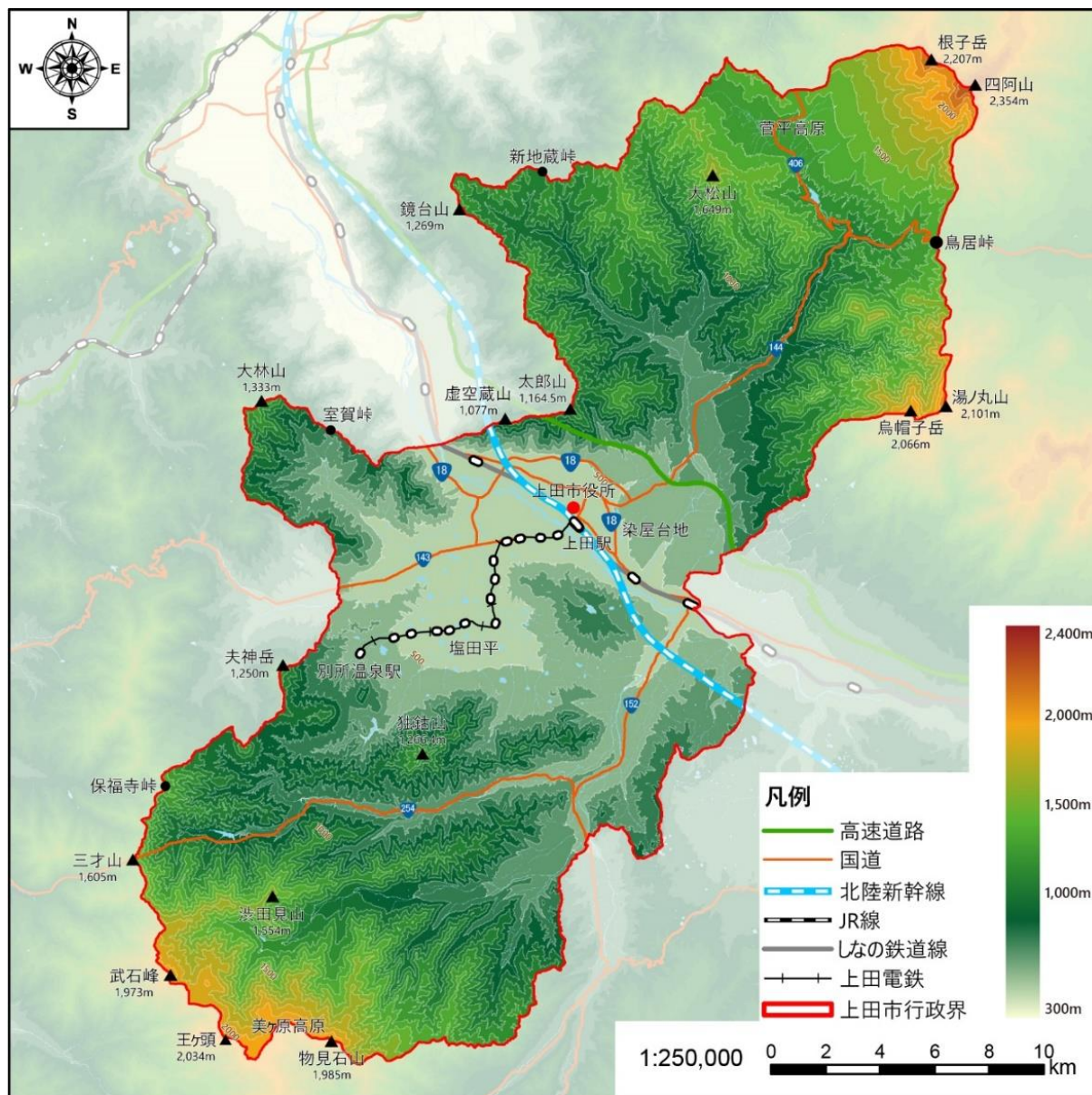
● 上田市役所  
本庁舎の位置  
東経 138 度 15 分  
北緯 36 度 24 分  
海拔 456m

上田市の位置

## (2) 地形・地質

### ア. 地形・水系

上田市は四方を 1,100～2,300m 級の山々に囲まれている。北に太郎山(1,164m)、北東に四阿山(2,354m)、東に烏帽子岳(2,066m)、南に王ヶ頭(2,034m)、西に夫神岳(1,250m)などがそびえている。また北東部と南部には、それぞれ上信越高原国立公園に指定されている菅平高原、八ヶ岳中信高原国立公園に指定されている美ヶ原高原が広がる。



上田市の標高図

市内には大小あわせておよそ 120 の河川が存在し、周囲の山々を源流とする依田川、神川、浦野川等が本市の中央部を東から北西に向かって貫流する千曲川へ合流している。





## イ. 地質

上田盆地は、今から約 1700 万年前から 520 万年前までのあいだ、“フォッサ・マグナ”と呼ばれる大地溝帯が広がっていた地域である。上田地域の海成層は、最下位の最も古い地層から最上位の新しいものへ、内村層・別所層・青木層・小川層に区分されている。

内村層は、新第三紀中新世前期の 1500 万年前から 1700 万年前の堆積物で、緑色凝灰岩（グリーンタフ）と呼ばれる岩石をはさんでいることが特徴である。太郎山や独鈷山系の山に内村層の岩石が見られ、太郎山の緑色凝灰岩（一説には流紋岩）は、上田城の石垣に使用され、城下の寺社の参道等にも多用されている。

別所層は、フォッサ・マグナが最も広がった中新世中期の 1400 万年前から 1500 万年前ごろに堆積した地層で、ほとんどが黒色の泥岩層であるが、小泉では凝灰岩層も見られる。動物や植物の化石を多く含んでおり、主に別所温泉・浦里・小泉・伊勢山などに分布している。



上田城南櫓石垣（緑色凝灰岩）

年代区分		地層区分		主な火成活動	大型動物化石	
1万年	第 四 紀	完 新 世	扇状地、崖錐堆積物	湖沼の堆積物	ナウマンゾウ(下本郷、青木村当郷)、アジアノロバ(上室賀)、エゾシカ(神畑)、ヤベオオツノシカ(青木村当郷)	
			上田湿地性堆積物			
13万年 70万年	更 新 世	旧 石 器 時 代	上田原湖成層	上田泥流 鷺場火山灰流 烏帽子岳輝石安山岩 神科虚空蔵山輝石安山岩	アケボノゾウ(丸子町塩川)	
			新期上小湖成層			
170万年	生	鮮 新 世	古期上小湖成層	茂沢溶結凝灰岩		
			大 杭 層			
520万年	第 三 紀	中 新 世	小 川 層	海の堆積物	シナノイルカ(小泉)、クジラ(小泉、伊勢山) ホオジロザメ(丸子町和子)	
1100万年			青 木 層			
1400万年			別 所 層			
1500万年			内 村 層			
1700万年	紀	漸 新 世		半過岩鼻角閃石石英ひん岩 太郎山天狗岩流紋岩 弘法山石英安山岩	小泉凝灰岩 独鈷山玄武岩質安山岩 緑色凝灰岩	
6500万年			始 新 世			
			暁 新 世			

上田地域の地層区分表

出典：上田市誌



青木層は、1100 万年から 1400 万年前ごろの地層で、砂岩と泥岩が互い違いに重なっている互層が主で、礫岩層をはさんでいる。上田市指定名勝の「鴻の巣」と呼ばれる崖で顕著に見られる。青木層には、貝の化石や有孔虫の化石、ノジュールなどが含まれる。

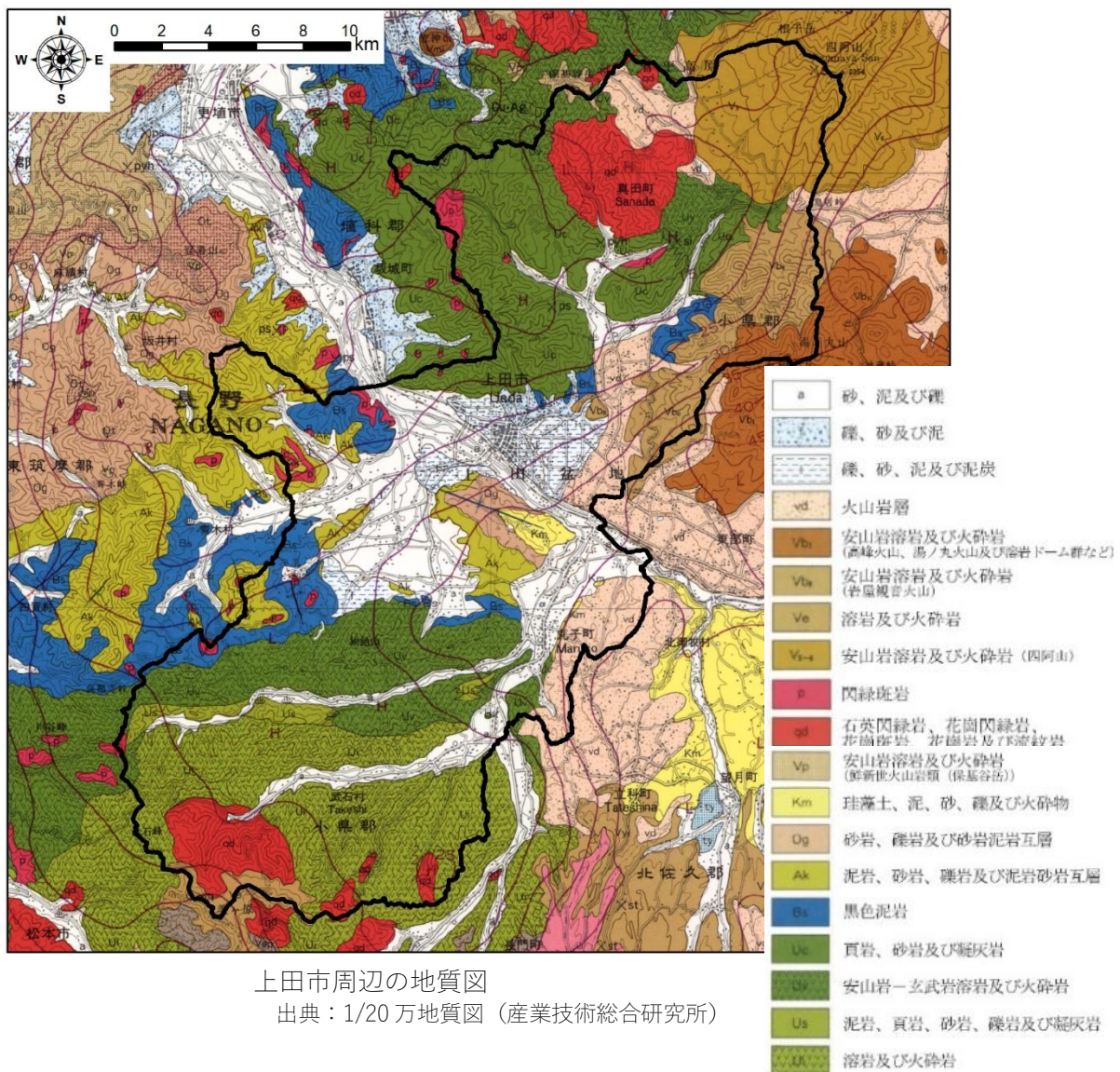


鴻の巣（礫岩が堆積した崖）

小川層は 520 万年から 1100 万年前ごろの地層で、砂岩と泥岩の互層や礫岩層が主であるが、安山岩質の凝灰角礫岩層も小川層に含む。

海の堆積物である海成層の上部には湖沼であったころの堆積層があり、大杭層、古期上小湖成層、新期上小湖成層、上田原湖成層が不整合に重なる。

これらの分布から、次第に湖沼から盆地へと移り変る様子をうかがうことができる。また、この湖水のあったころにはナウマンゾウが生息しており、新期上小湖成層からはナウマンゾウの歯の化石も発見されている。

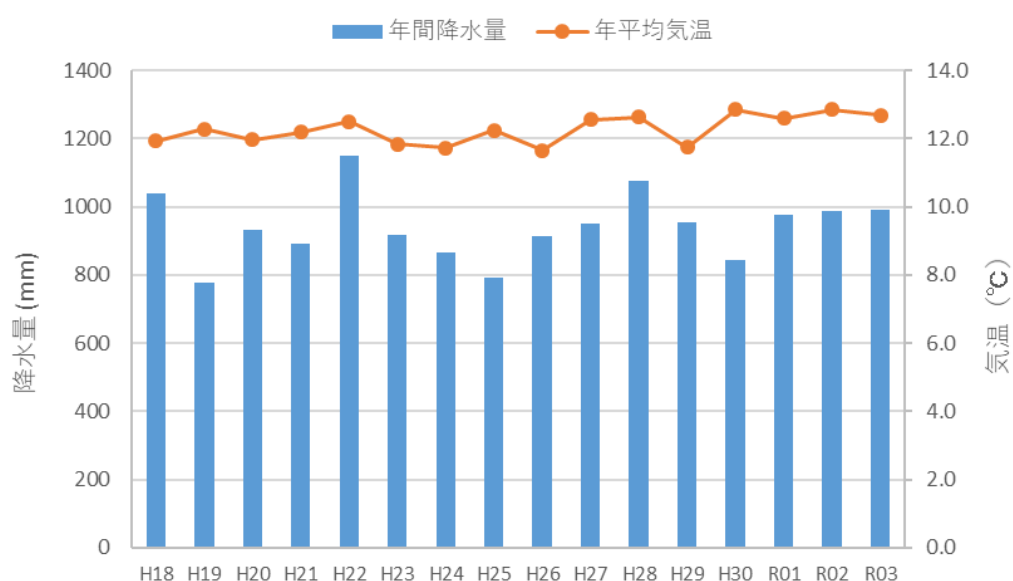


### (3) 気象

上田市の年間平均気温は 12°C程度で、夏は気温の日較差が大きく、日中の気温に比べると夜間は比較的過ごしやすい。年間の最高気温は 35°C前後、最低気温は -10°C前後であり、昼夜、夏冬の寒暑の差が大きい典型的な内陸性気候である。日照時間は年 2,000 時間以上、快晴の日は年間約 80 日に達し晴天率が高く、年間の平均降水量が約 900mm と全国でも有数の少雨乾燥地帯である。積雪は、山間地以外の地域では 10cm を超えることは稀である。

気温 (°C) , 降水量 (mm)

	年平均気温	年間最高気温	年間最低気温	年間降水量	日最大降水量
平成18年 ( 2006 )	11.9	35.0	-10.8	1040	85.0
平成19年 ( 2007 )	12.3	36.6	-8.5	777	72.0
平成20年 ( 2008 )	12.0	35.9	-10.5	933	51.5
平成21年 ( 2009 )	12.2	34.7	-10.3	891	69.0
平成22年 ( 2010 )	12.5	36.6	-10.4	1151	82.0
平成23年 ( 2011 )	11.8	36.2	-11.1	917	75.0
平成24年 ( 2012 )	11.7	36.4	-12.2	868	79.0
平成25年 ( 2013 )	12.2	37.4	-10.2	792	63.5
平成26年 ( 2014 )	11.7	37.5	-10.1	914	41.0
平成27年 ( 2015 )	12.6	36.1	-8.8	952	49.0
平成28年 ( 2016 )	12.6	34.9	-11.8	1076	113.5
平成29年 ( 2017 )	11.7	35.9	-10.8	955	75.5
平成30年 ( 2018 )	12.9	38.3	-11.9	842	62.0
令和元年 ( 2019 )	12.6	37.5	-9.3	975	143.0
令和2年 ( 2020 )	12.8	37.6	-9.6	989	60.0
令和3年 ( 2021 )	12.7	37.3	-8.8	992	95.0



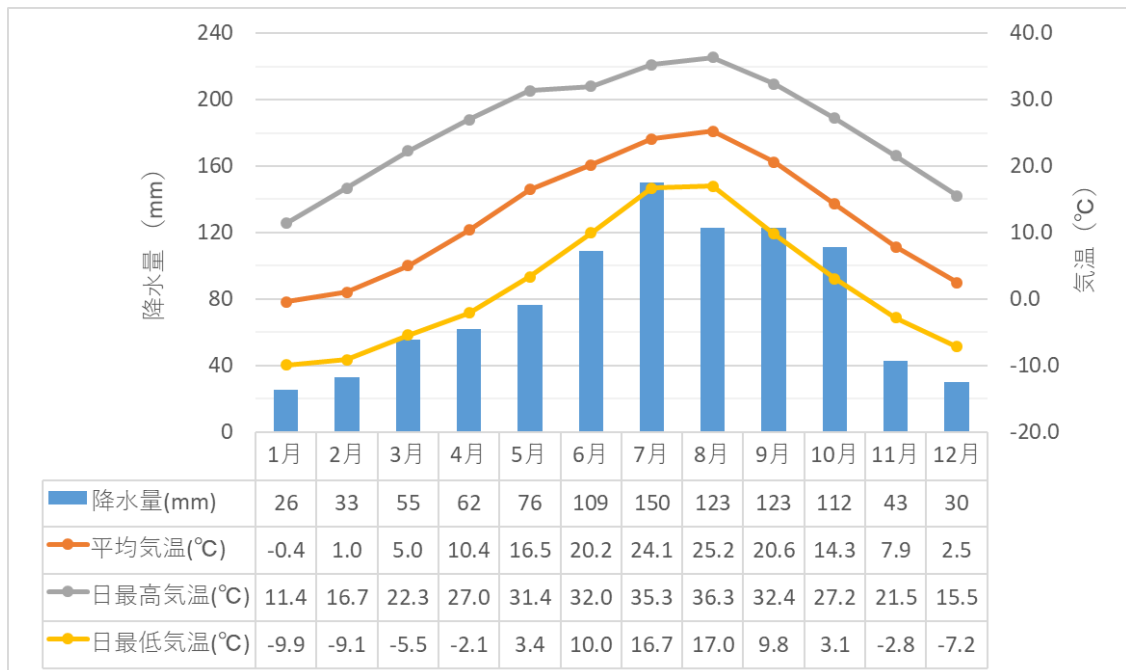
気象概況の推移 (観測地点：上田市古里)  
 参考：気象庁 HP (<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>)



風は年間を通じて東や西から吹く風が多いことが特徴で、これは、南や北に山々が連なっている地形の影響を受け、風が千曲川に沿って東西に吹き抜けるためと考えられる。

上田市域は標高差が 2,000m 弱に及び、山々や平坦地の地形の変化も著しい。このため、地域ごとの気象の変化が大きいのも特徴である。

なかでも菅平高原は冬期の気温が $-20^{\circ}\text{C}$ を下回ることもある全国でも有数の厳寒地であり、8月の平均気温も $19.5^{\circ}\text{C}$ と冷涼な地域である。



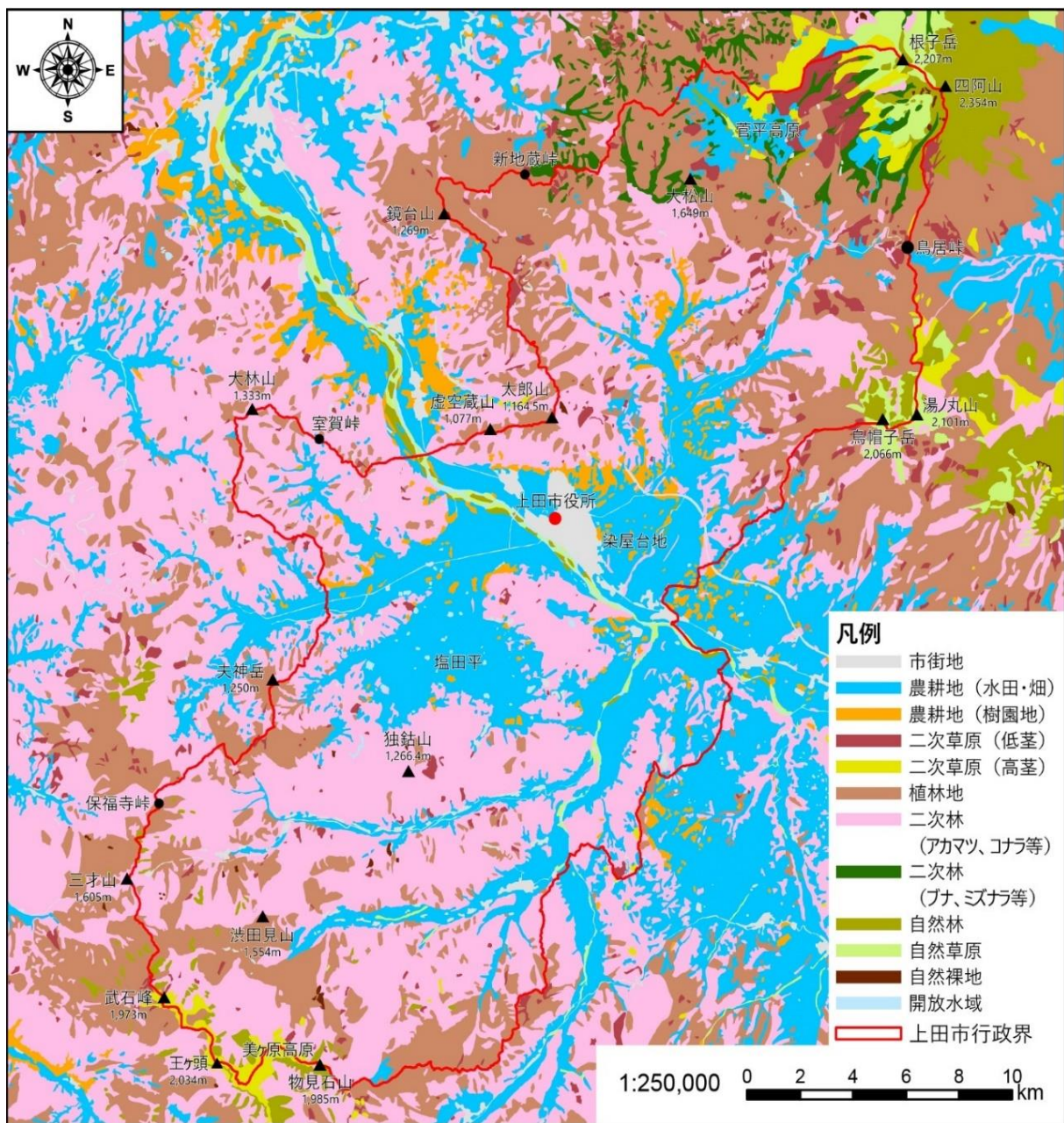
最高・平均・最低気温及び降水量の推移（平成 18 年～令和 3 年平均（2006～2021））

参考：気象庁 HP (<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>)

#### (4) 生物相

##### ア. 植生・植物

上田市は太平洋側と日本海側の境界付近にあたり、多様な植物分布が見られる。上田市域の平地は標高 500m 前後に位置し、植生の垂直分布では丘陵帯から低山帯に相当する。現在の多くは人工林・天然林であり、里山として人による管理が行われてきた。アカマツは建築材や杭、家庭用燃料、松明や門松、ついには戦争中の松根油にいたるまで、幅広く利用されてきた。また、落ち葉や枯れ枝は焚きつけなどに利用されてきた。アカマツ林は、マツタケの産地として重用されてきたが、里山の荒廃やマツノザイセンチュウによる、マツクイムシ被害により徐々に減りつつある。



上田市の植生図

出典：環境省 生物多様性センター 1/5 現存植生図（第 7-8 回自然環境保全基礎調査報告書）



里山ではほかに、コナラやクヌギ林を多く見ることができる。通称染屋台といわれる大段丘沿いには、「グリーンベルト」と呼ばれるケヤキ林が帯状に続く緑地帯が広がる。

山地のうち、烏帽子岳や、菅平高原・美ヶ原高原の山々は常緑針葉樹林の優占する亜高山帯、その上部は低木や高山植物が見られる高山帯に属している。菅平高原は、根子岳・四阿山の麓に広がる 1,300m の高原で、レンゲツツジやイワカガミなどの高山植物が自生する。美ヶ原高原は、標高約 2,000m の溶岩台地で、夏には広大な草原にニッコウキスゲやヤナギランなど 200 種類以上の亜高山植物が見られる。

また、岩鼻は標高 1,000m 以下の山ではあるが、千曲川沿いの断崖で強い風が常に吹いて涼しく、岩場にモイワナズナという寒地性植物の自生地がみられる。



グリーンベルト

## イ. 動物

千曲川の川原と中洲には、魚や川虫を食べるサギなどをはじめ、春から夏に子育てをするコチドリ、秋に南へ渡る前のねぐらに使うツバメなどもいる。さらにバツタやコオロギなど、小さな動物も川原をすみかにしている。

山の水源に恵まれない塩田平の水田地帯と周りの山あいにはため池が数多くあり、このような環境は、動物たちの種類や分布

に大きく関係する。ため池では、初夏にカイツブリが小魚を餌に雛を育て、冬はカモ類がやってくる。また、止水性のヤンマ類・トンボ類が豊富にみられる。しかしながら、市の天然記念物に指定されたマダラヤンマの生息数は激減している。

黄金沢のヒメギフチョウのように乱獲によりいなくなったものや、川の汚れや三面コンクリート用水路になって姿を消すカラスガイのような動物もたくさんいる。一方、今まで里にいなかった動物が見られるようになった。特別天然記念物のニホンカモシカは、数が増えて食害も懸念され、イノシシやホンシュウジカ、ニホンザルが出没するようになった。千曲川にはアオサギやアマサギがみられるようになり、ブラックバスは、池の魚ばかりか水中のあらゆる動物を食べ、水中の自然を破壊しながら増えている。



マダラヤンマ

## 2. 社会的環境

### (1) 市の沿革

上田市は、平成18年(2006)3月6日に上田市、丸子町、真田町、武石村が対等合併して誕生し、現在に至る。合併後においては一体的な都市形成を図ると同時に、旧市町村に地域自治センター、各地域に地域協議会を置くなど分権型自治の体制を整え、上田中央地域、上田西部地域、神科・豊殿地域、上田城南地域、川西地域、塩田地域、丸子地域、真田地域、武石地域の9地域において個性と特性を生かしたまちづくりを進めている。

また上田市に、東御市、長和町、青木村を含めた4市町村は、上小地域(旧小県郡と概ね一致)と呼称されることもある。



地域区分図





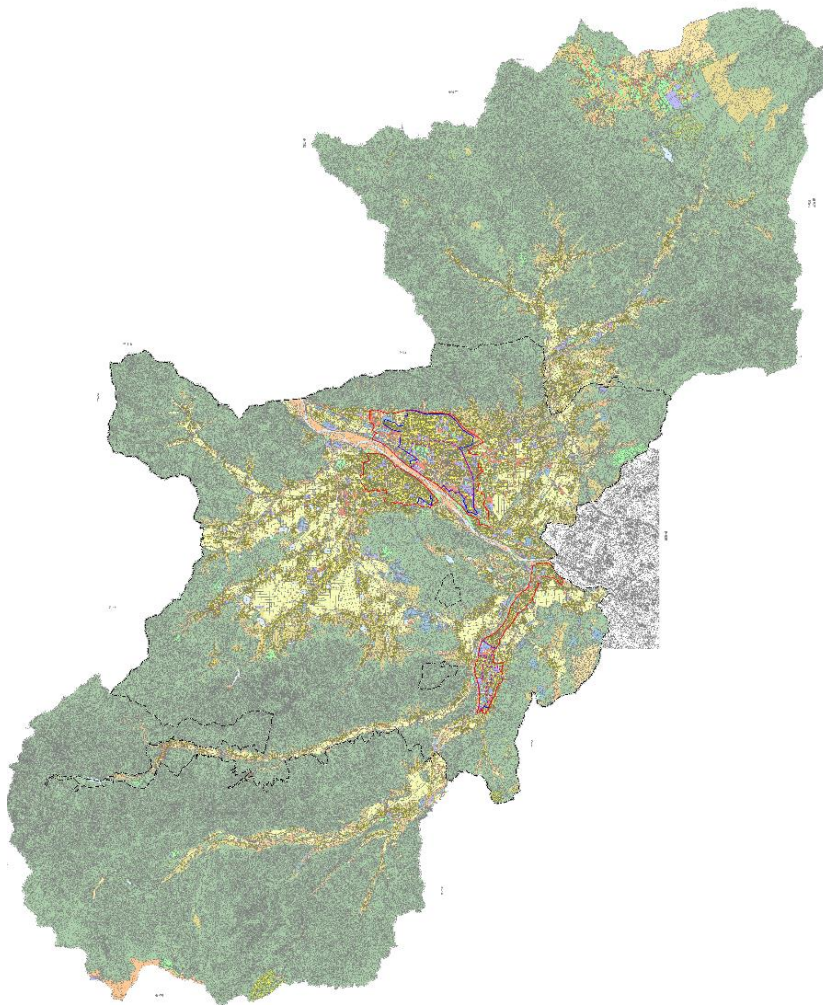
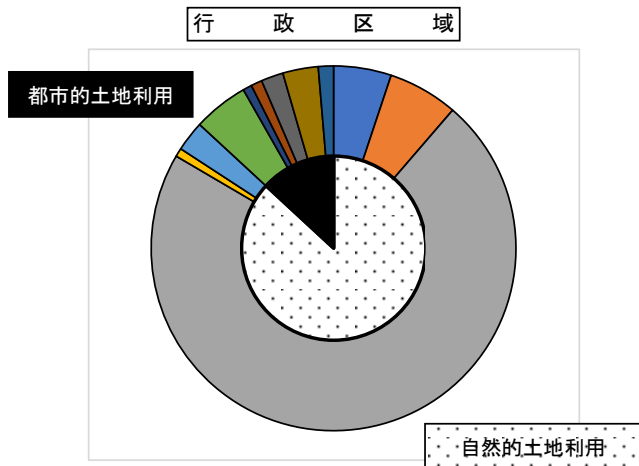
## (2) 土地利用

土地利用の状況を土地利用区別にみると、行政区域面積 55,204ha のうち山林 72.1%、農地 11.3%などとなっており、水面等を含めた自然的土地利用は 86.9%である。残りの 13.1%は宅地等の都市的土地利用である。

■土地利用別面積（行政区域）

利用区分	行政区域	構成比
田	2,825.7	5.1
畑	3,423.9	6.2
山林	39,810.4	72.1
水面	416.4	0.8
その他自然地	1,482.8	2.7
住宅用地	2,701.7	4.9
商業用地	438.0	0.8
工業用地	545.3	1.0
公共・公益用地	1,083.8	2.0
道路用地	1,735.6	3.1
その他都市的土地利用	740.4	1.3
合計	55,204.0	100.0

(単位：ha、%)



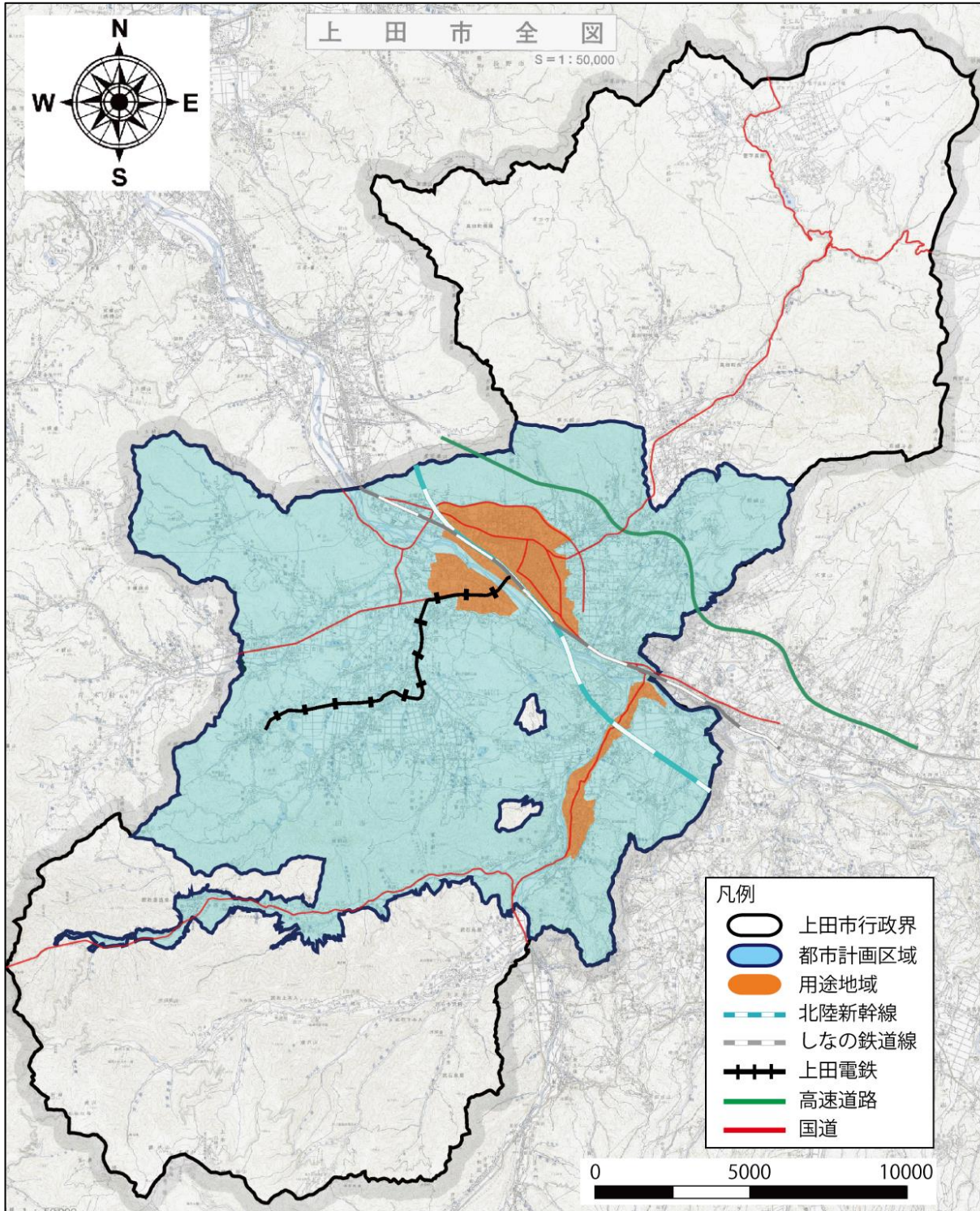
土地利用現況図	
田	
畑	
山林	
水面	
その他の自然地	
住宅用地	
商業用地	
工業用地	
公益施設用地	
道路用地	
交通施設用地	
公共空地	
その他の公的施設用地	
その他の空地	
用途地域指定区域	
都市計画区域	
居住誘導区域	
都市機能誘導区域	

土地利用別面積（上） / 土地利用現況図（下）

参考：上田都市計画基礎調査報告書（令和4年2月）



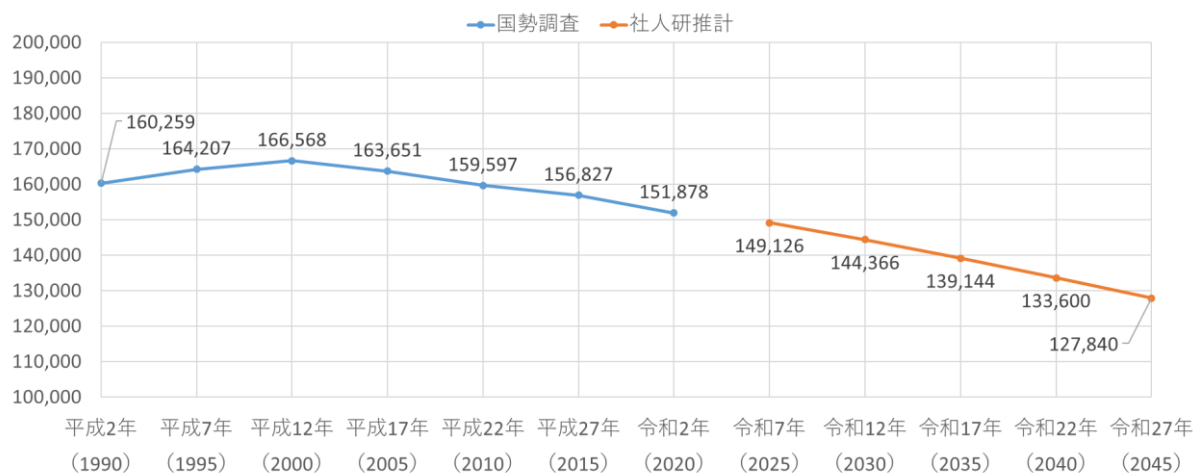
都市計画区域は、平成 18 年（2006）3 月の市町村合併により上田都市計画区域と丸子都市計画区域が併存していたが、平成 26 年（2014）3 月に統合され新たな 1 つの「上田都市計画区域」となった。上田都市計画区域は市域のおよそ 42% の 23,294ha で、市街化区域と市街化調整区域の区域区分がない非線引きの都市計画区域である。



上田都市計画区域の範囲

### (3) 人口動態

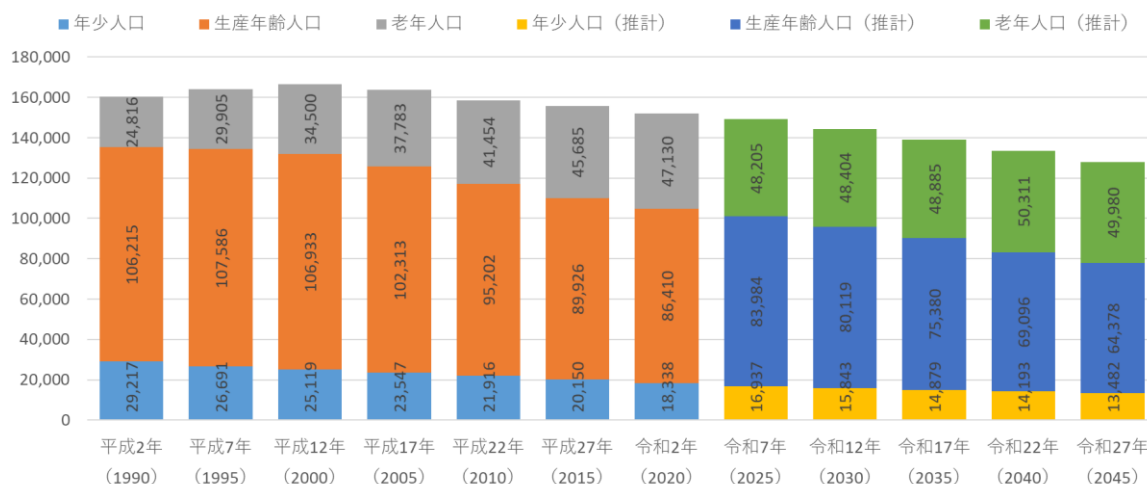
上田市の人口は、令和2年（2020）の国勢調査で151,878人であった。国勢調査ベースでは、平成12年（2000）の166,568人をピークに減少に転じ、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、今後も減少傾向は続き、令和27年（2045）に127,840人となり、平成27年（2015）からの30年間で約29,000人減少（減少率18%）すると推計されている。



#### 総人口の推移と将来推計

参考：上田市の統計（令和2年（2020）），日本の地域別将来推計人口（平成30（2018）年推計）

年齢3区別の人口は、年少人口と生産年齢人口は減少傾向、一方で老年人口は増加傾向にある。平成7年（1995）に老年人口が年少人口を上回り、少子高齢化が進展している。今後、老年人口の増加ペースは緩やかとなり、令和22年（2040）をピークに減少し始めると見られるが、年少人口と生産年齢人口の減少傾向は今後も続くため、令和27年（2045）には生産年齢人口1.29人で1人の老年人口を支えることとなる。



#### 年齢構成別の人口推移

参考：上田市の統計（令和2年（2020）），日本の地域別将来推計人口（平成30年（2018）推計）

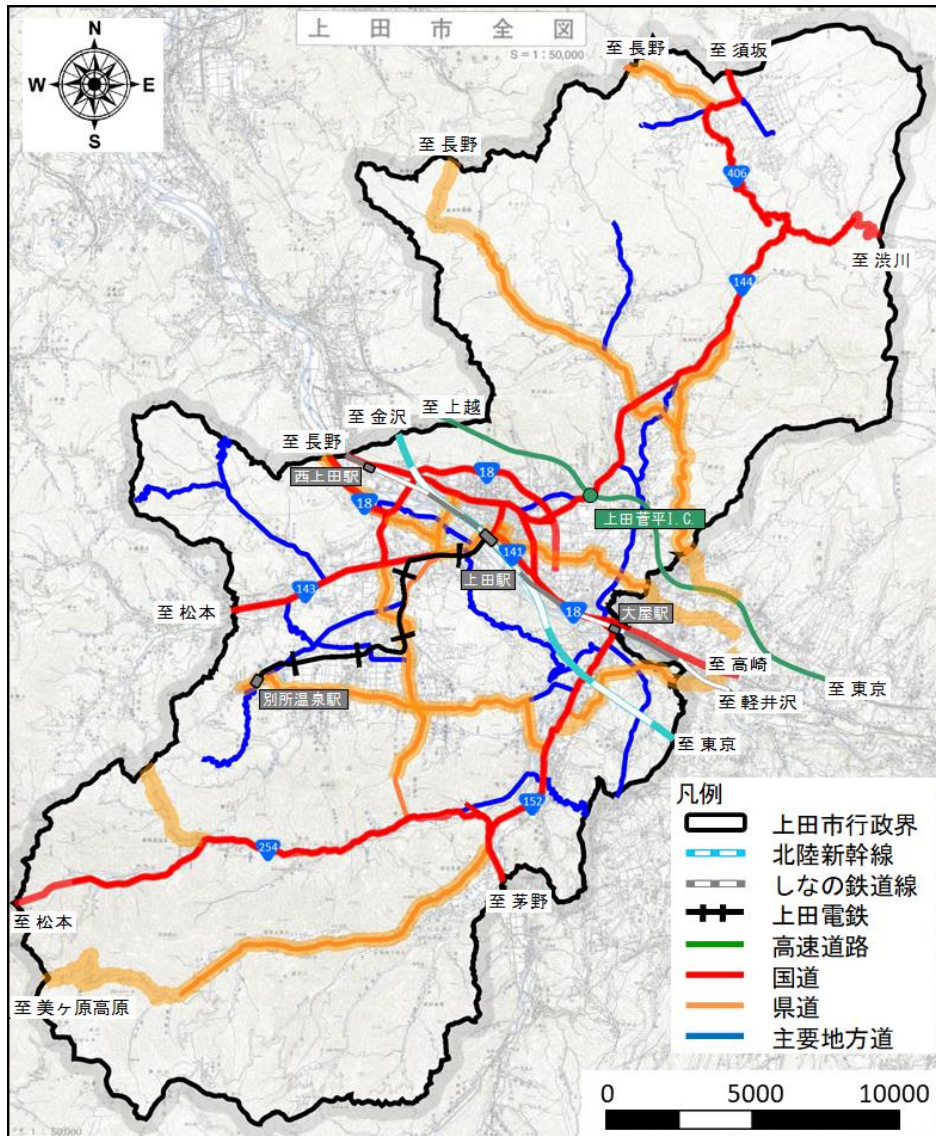


#### (4) 交通

上田市は、古代から都と東北地方を結ぶ「東山道」の拠点のひとつとして栄え、近世においては中山道追分宿（軽井沢町）から新潟県直江津（上越市）へ通じる北国街道が上田城下町を通過し、長く交通の要衝となってきた。

現在は上田駅に北陸新幹線、しなの鉄道線、上田電鉄別所線の鉄道や、路線バスが接続し、地域交通の結節点となっている。また上信越自動車道（上田菅平インターチェンジ）、および国道、県道、主要地方道も整備されている。

隣県や近隣市町村への交通網のうち高速交通網を除くと、長野市ならびに群馬県高崎市方面を結ぶ国道 18 号、佐久市、山梨方面を結ぶ国道 141 号、松本市を結ぶ国道 143 号及び 254 号、長和町、茅野市を結ぶ国道 152 号、山間部を須坂市方面ならびに群馬県嬭恋村へと結ぶ国道 144 号などの幹線道路が走っている。なお、国道 254 号は、松本市とは反対方面に長和町、群馬県藤岡市、埼玉県方向へ至る、古くから江戸を起点とする川越街道、信州街道などとも呼ばれるルートであり、北国街道と並んで五街道に準ずる脇街道であった。



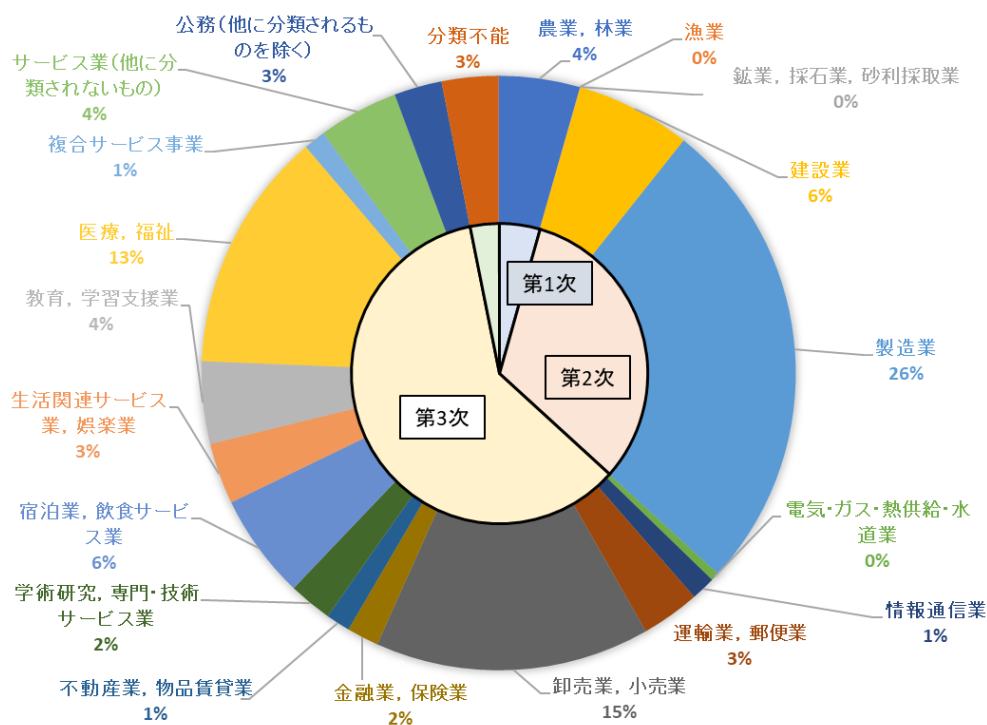
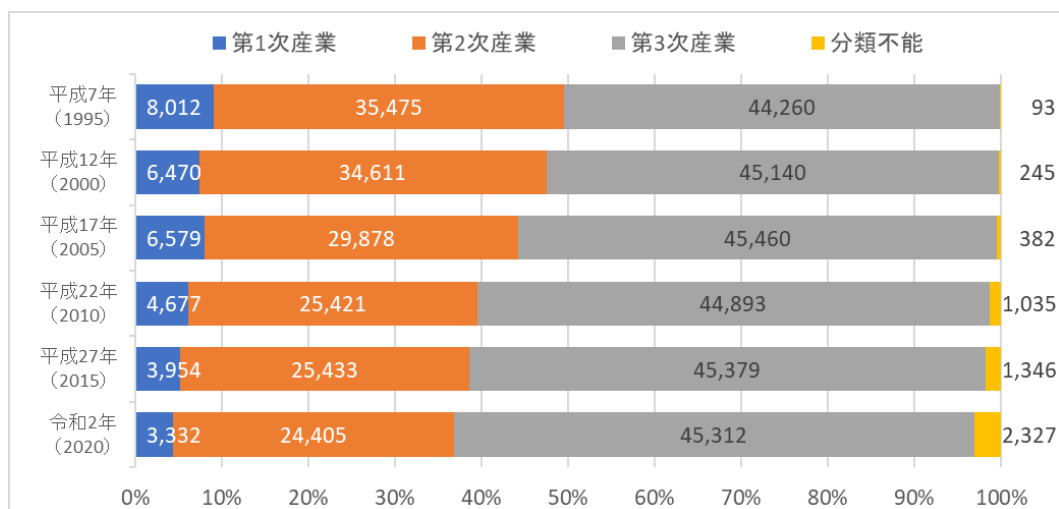
市内交通網図





## (5) 産業

上田市は、長野県東部の中核となる都市として、農業、工業、商業、サービス業のバランスがとれた都市として発展を続けている。就業人口の内訳は、第1次産業就業者の割合が4.4%、第2次産業が32.4%、第3次産業が60.1%となっており、第3次産業の就業者割合が年々増加している(令和2年(2020)国勢調査)。



産業大分類別就業者数の推移(上) / 産業大分類別人口構成比(下)

参考: 国勢調査\_令和2年(2020)

農業は、平坦部から高冷地の標高差、少雨多照な気象条件を活かし、多様な農産物が生産されている。「何でも作れる」産地としての強みを活かしながら、作付け品目を選定しブランド力のある産地化を推進している。比較的標高の低い平坦地では水稻、果樹(りんご、ぶどう、くるみ等)、切り花など、準高冷地では野菜や切り花、高冷地では高原野菜の生産が主力となっている。真田地域の北部に位

置する菅平高原の「レタス」、上田地域の「果樹、米、小麦」、丸子地域の「米」、武石地域の「ブロッコリー、切り花」など地場農産物の産地化・ブランド化を推進している。

また、かつて桑畑が広がっていた場所は遊休荒廃化が進んでいたが、本市特有の気象条件に加えて地産地消や農業の6次産業化等の推進が追い風となり、近年では丸子地域の東部に位置する陣馬台地においてワイン用のぶどうが栽培されている。

水産業は、その数は減少したが、千曲川で「つけば漁」が行われる。「つけば漁」は長野県東部にみられ、江戸時代から続くといわれる伝統的な漁法である。ハヤの産卵の習性を利用して、人が産卵場所を作ったり、活きの良いハヤを入れた種箱を川に沈め、その匂いで下流からハヤをおびき寄せたりして、薬や投網などで捕獲する漁である。

工業は、かつて蚕糸業で培われた技術的基盤や進取の精神が機械金属工業に受け継がれ、現在は輸送関連機器や精密電気機器などを中心とする製造業が地域経済を牽引し、高度な技術を有する企業の集積が見られる。

商業においては、中央地域と丸子地域に商店街が形成されており、古くから街の発展に寄与してきた。現在でも新規に店舗が開店するなど、にぎわう様子もみられる。また、上田駅近郊には、大型ショッピングモールも出店され、上田市外からも広域的に人が集まっている。

また、平成14年(2002)2月、信州大学繊維学部内に設置した上田市産学官連携支援施設(浅間リサーチエクステンションセンター:AREC通称エーレック)においては、地域企業と信州大学と上田市が連携し、共同研究を通して新製品の開発や技術開発などに取り組んでおり、企業のニーズと大学の研究を融合させた地域産業の活性化及び産学官連携のトップランナーとして全国から注目されている。



菅平高原のレタス畑(上)  
陣馬台地のぶどう畑(中)  
千曲川のつけば漁(下)

出典: 上田市ウェブサイト



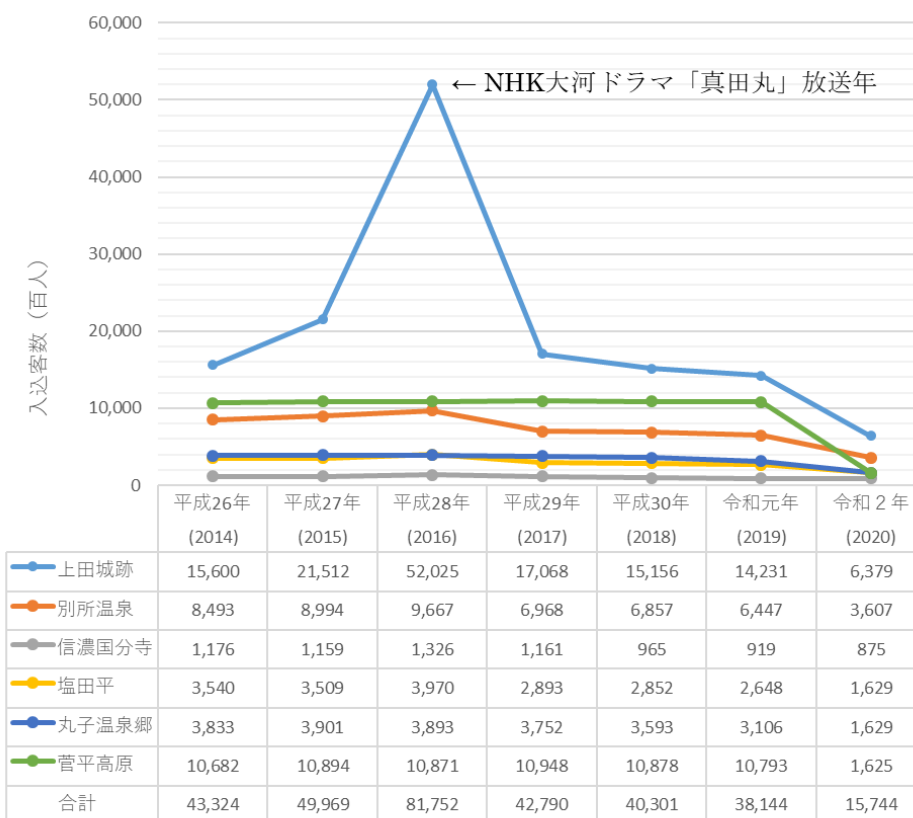
## (6) 観光

上田市は、奈良・平安時代の信濃国分寺、鎌倉時代から室町時代にかけての寺社が残る塩田平、戦国時代の上田城や城館跡等、歴史的・文化的遺産を数多く有している。また、スポーツリゾート地である菅平高原や、360°に大パノラマが広がる美ヶ原高原の2つの高原に代表される雄大な自然、信州最古の温泉とされる別所温泉をはじめとする由緒ある温泉等、地域の個性が際立つ豊富な観光資源も有しており、四季折々に訪れる人を魅了している。

近年の集客の特徴として、歴史的人物や城・城跡等へのブームが一例としてあげられるが、特に、平成28年(2016)のNHK大河ドラマ「真田丸」の撮影地となり、真田氏やその歴史への注目の高まりやロケ地となった舞台への来訪客の急増、関連イベントの開催等により、平成28年(2016)の観光来訪客数は前年比でおよそ1.6倍となった。特に上田城跡の観光客数に関しては前年比およそ2.4倍と激増したが、別所温泉や塩田平では前年比およそ1.1倍、丸子温泉郷や菅平高原ではほぼ横ばいと大河ドラマの効果は一部の地域にとどまった。

翌年の平成29年(2017)では、上田城跡は前年度比0.33倍と激減、塩田地域(塩田平、別所温泉等)は約0.72倍となった。

これら観光資源の魅力を高め、有機的に連携させ、さらに集客力を高める取り組みを行うとともに、農業体験やグリーンツーリズムを推進するなど、新たな広域体験観光にも力を入れている。



単位：百人

観光入り込み客数の推移

参考：上田市の統計（令和2年度）

### 3. 歴史的環境

#### (1) 歴史

##### ア. 旧石器時代～縄文時代

上田市域で石器が出土する最も古い地層は、菅平高原の約2万年前の旧石器時代のものである。塩田地域の堰口ノ一遺跡、真田地域傍陽地区の新地蔵峠遺跡や本原地区の境田遺跡などでも、この時代の石器が発見されている。

土器を使い始めた縄文時代草創期（15,000～12,000年位前）の遺跡は、菅平高原の唐沢B遺跡が知られるが、石器が出土したのみで、竪穴建物跡や土器は検出されていない。早期（12,000～7,000年前）の遺物は、菅平高原の大松山遺跡や神科・豊殿地域の大日ノ木遺跡、城南地域の上田原遺跡群、丸子や武石地域等、高原だけでなく標高の低い台地からも発見されている。前期（7,000～5,500年前）もほぼ同様ではあるが、真田地域の四日市遺跡では集落跡が発見されている。

長野県を含む中部高地は、縄文時代中期になると人口が増え、見事な模様の縄文土器や土偶が出現するなど、縄文文化が栄華を極める。市内でも前期末から中期（5,500～4,500年前）に集落が増え、神川流域（四日市遺跡・八千原遺跡・浦沖遺跡）や黄金沢扇状地（八幡裏遺跡群）、武石川から依田川流域（岩ノ口遺跡・中丸子遺跡ほか）において、大きな集落遺跡が発見されている。後期（4,500～3,300年前）の遺跡には、八千原遺跡・八幡裏遺跡群・丸子地域の深町遺跡・真田地域の雁石遺跡があるが、遺跡数は激減する。続く晩期（3,300～2,800年前）には浦野川流域の下前沖遺跡・上田原遺跡群・大日ノ木遺跡・雁石遺跡・四日市遺跡等において遺構と遺物が見つかるが、その量はごくわずかであり、隆盛を極めた縄文文化の面影は既になくなりつつあったようである。

##### イ. 弥生時代

千曲川流域に稲作が伝えられた時期は明確ではないが、弥生時代中期（2,100～1,900年前）になると長野盆地や佐久盆地で大規模な集落が営まれるようになり、上田市域では後期後半になってようやく集落が出現したようである。集落の立地は河岸段丘上や自然堤防など、冠水しにくく、稲作に適した低湿地の近くが選ばれている。

代表的な遺跡として、千曲川右岸では、中央地域の常入遺跡群下町田遺跡や西部地域の宮原遺跡等がある。千曲川左岸では、浦野川流域や産川流域に多くの集落遺跡の分布がみられる。また、室賀川の段丘上にある岳之鼻遺跡は弥生後期の大規模な拠点集落とみられており、出土した遺物・遺構からは、複数の集団による稲作や機織りなどが行われていた生活の風景が想像される。

菅平高原の唐沢岩陰遺跡は、縄文時代から古墳時代まで続く生活の跡で、二千年余りの長期間にわたる特異な遺跡例として知られる。太郎山中腹にある、弥生終末期から古墳時代初頭の上平遺跡は、時代の転換期の短いあいだに出現した高地性集落で、外部からの侵入者に対する防衛のために、高所に集落を移したものとして、他の集落との緊張関係をうかがわせる。



## ウ. 古墳時代

上田市域には142基の古墳が確認されており、神川沿岸や塩田地域に多くみられる。その築造は遅く、4世紀後半に方墳、6世紀前半に前方後円墳が見られる。これは、同じ千曲川水系にある森將軍塚古墳（千曲市）を築いた更埴地方のように、大きな政治的権力が育っていなかったことを物語るとともに、上田市域が中央政権の影響下に置かれるのが他地域に比べて遅かったためと考えられている。

また、長野県の古墳からは馬具の出土が多いが、上田市域でも真田地域の鶴ノ子田古墳、塩田地域の他田塚古墳・塚穴原1号墳、神科・豊殿地域の法楽寺遺跡内の古墳から、飾り馬の埴輪の破片・馬具・馬の頭部の骨が出土しており、馬が飼育されていたことが推測される。



古墳時代の遺跡（古墳の分布と集落等）

そのほか、5 世紀中ごろの丸子地域にある鳥羽山洞窟<sup>とばやまどうくつ</sup>は、遺体を開口する洞窟に納めて曝す「曝葬<sup>ばくさう</sup>」をした遺跡であり、古墳以外の葬送儀礼<sup>そうそうぎらい</sup>を知ることができる点が貴重である。

古墳時代前期の集落遺跡は小規模なものが多いが、後期になると大規模な事例が出現する。その代表的な例が国分寺周辺遺跡群で、居館<sup>いぐん</sup>の濠<sup>ほ</sup>とみられる方形の溝が発見されている。また、丸子地域の社軍神遺跡<sup>しゃぐんじん</sup>からは玉作り工房跡が検出され、畿内<sup>きない</sup>のヤマト政権と結びついた玉作りの専門技術者の存在が想定されている。



つかあなはら  
塚穴原1号墳

出典：上田市文化財マップ HP



しゃぐんじん  
社軍神遺跡

出典：上田市立丸子郷土博物館 HP

## エ. 奈良・平安時代

奈良時代になると、大宝律令のもと信濃国府が設置され、国司が派遣され統治が行われた。10 世紀に成立した『和名類聚抄<sup>わみょうるいじゆしやう</sup>』には、国府は筑摩郡（松本市）にありと記されているが、信濃国分寺は上田市域に建立されており、国府と国分寺は近接して設置されることが一般的であるため、9 世紀ごろに上田から筑摩郡に移ったと考えられている。上田における国府の所在地は、関連地名や条里的遺構が残る染屋台や、信州大学繊維学部周辺が有力とされている。

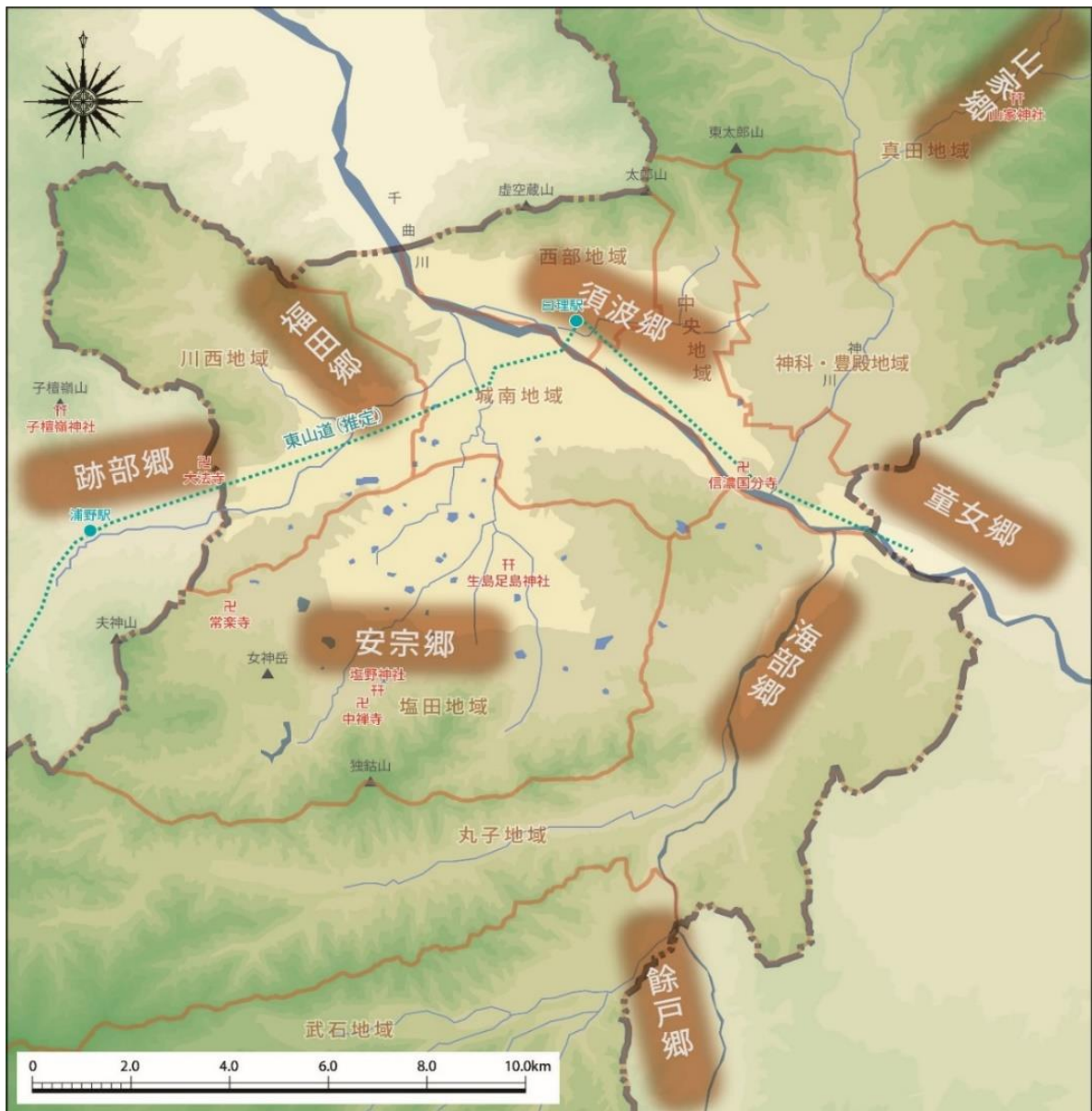
かつて奈良や京都と東北地方を結んでいた東山道の経路については、初期は伊那郡から直線的に佐久方面へと抜けていたようである。その後、官道として整備されてからは筑摩郡を経由するようになり、この時点で上田地域を通過するようになった。詳細な位置は不明ではあるが、信濃国分寺跡に近い千曲川沿いを東に向かって上野国へ抜けていたことは確かで、小県郡には、国府・国分寺・東山道があり、信濃国の政治・経済の拠点であったと考えられる。

信濃の政治の中心となった小県郡には、童女、山家、須波、跡部、安宗、福田、海部、餘部の 8 つの郷が置かれている。塩田地域には信濃国の古社「生島足島神社<sup>いくしまたるしまじん</sup>」が祀られ、その付近一帯には「あそ（阿曾・安曾）」という地名や、「他田塚」と言われる古墳も残されている。こうした地名はいずれも信濃の国造<sup>くにのみやつこ</sup>（地方豪族）に関係があると考えられており、塩田地域にいた国造は、次第に中央政府の支配下に入り、代わって中央から各国に派遣された役人（国司）が治めるようになる。



『延喜式』（平安時代中期に編纂された格式（律令の施行細則）で三大格式の1つ）には、信濃国東部の牧（皇室の馬を飼育する土地）として望月牧・新治牧・長倉牧・塩野牧・塩原牧が見られる。

上田市域では、上田市浦野の「馬越」や青木村の「牧寄」など牧に関する地名の分布や、浦野の「馬背神社」の存在などを考え合わせると、古代の勅旨牧の1つの塩原牧が子壇嶺岳南麓一帯にあったと考えられる。牧の管理には、高度な技能を持つ人たちが必要で、渡来人等が携わっていたことも考えられる。



古代の上田（東山道と8つの郷）



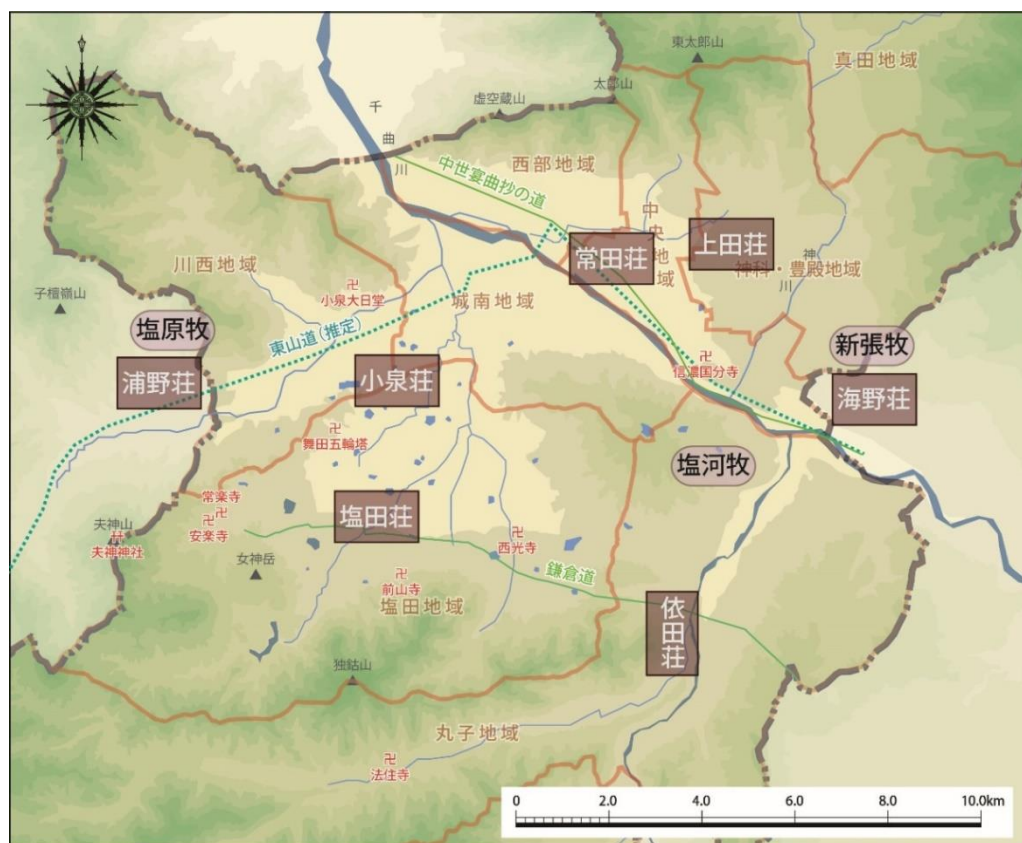
## オ. 中世

律令制度が崩壊に向かう平安時代末、開発領主の寄進により貴族や寺社が経営する荘園が数多く成立した。『吾妻鏡』（鎌倉時代の歴史書）には、上田市域の浦野庄・塩田庄・小泉庄・常田庄・海野庄・依田庄の6つの荘園と、塩原牧・新張牧・塩河牧の3か所の牧の名が見られる。また、嘉暦4年(1329)の『諏訪大社上社 文書』には上田荘の名が見られる。

治承4年(1180)、木曾義仲は依田庄依田城(丸子地域)を本拠地に挙兵して以仁王の平家打倒の令旨に応じて兵力を集めた。義仲は上洛して政権の中枢に座ったものの、源頼朝に敗北した。鎌倉時代になると、海野氏、祢津氏、泉氏、浦野氏は鎌倉御家人となった。一方、それまで有力者だった塩田氏などは、義仲に与したために所領を失ったとみられている。

鎌倉時代の塩田平では幕府の重臣である島津氏、その後は北条氏が地頭職をつとめ、北条義政が移り住んだあとは塩田北条氏が3代60年間にわたって治めた。塩田守護所と鎌倉を結ぶ鎌倉道が整備され、北条氏の庇護もあり、全国から学問僧が集まり、塩田平は「信州の学海」と称されるまでに繁栄した。

なお、正安3年(1301)に僧明空が記した『宴曲抄』の「善光寺修行」には、鎌倉から善光寺への道筋が記されている。白井山(碓氷峠)以降、軽井沢町の離山、東御市の桜井、上田市域の岩下・塩尻を通り、善光寺へ向かっており、のちの中山道から北国街道に沿った道筋が14世紀初頭にはあったことを示している。また、この道筋は古代の東山道の一部ではないかと推定されている。



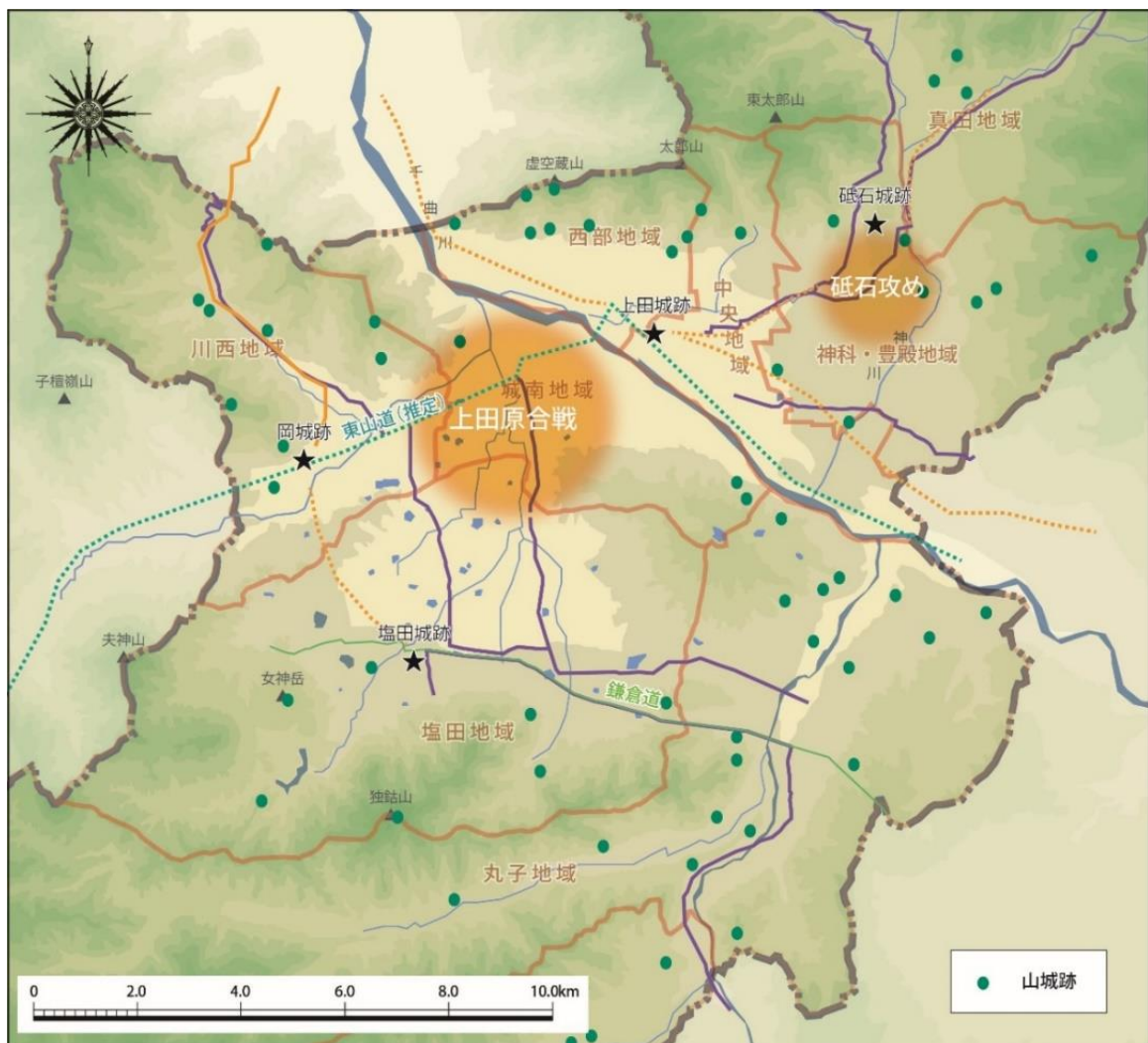
中世の上田(鎌倉道と荘園・牧)

鎌倉幕府が滅亡して信濃から北条氏の勢力が消滅すると、上田市域も在地の領主による争乱の時代に入り、坂城町にある葛尾城を本拠とする国人領主村上氏が支配を広げた。

天文年間、上田小県を領有した村上氏は、信濃侵攻をなした甲斐の武田氏と上田原と砥石城で闘い（上田原合戦、砥石攻め）、いずれも大勝した。しかしながら、天文20年（1551）に、武田配下の真田幸隆が砥石城を乗っ取り、川中島へと進出していく。

武田氏滅亡後の戦乱の世で、幸隆の子昌幸は小県郡一円を支配下に収め、天正11年（1583）には上田城の築城を開始した。また、現在の市街地の骨格をなす城下町づくりも行った。

真田氏は上杉氏や羽柴（豊臣）氏に臣属し、天正13年（1585）の第一次上田合戦と、慶長5年（1600）の第二次上田合戦において上田は徳川勢の攻撃にさらされたが、よくそれをしのいだ。関ヶ原合戦の東軍勝利の後、上田城は破却されたものの昌幸の嫡男信之が沼田・小県を合わせた9万5千石を領して上田城主となり、領域支配を確固たるものとした。



戦国期の上田（軍事道路と城郭）



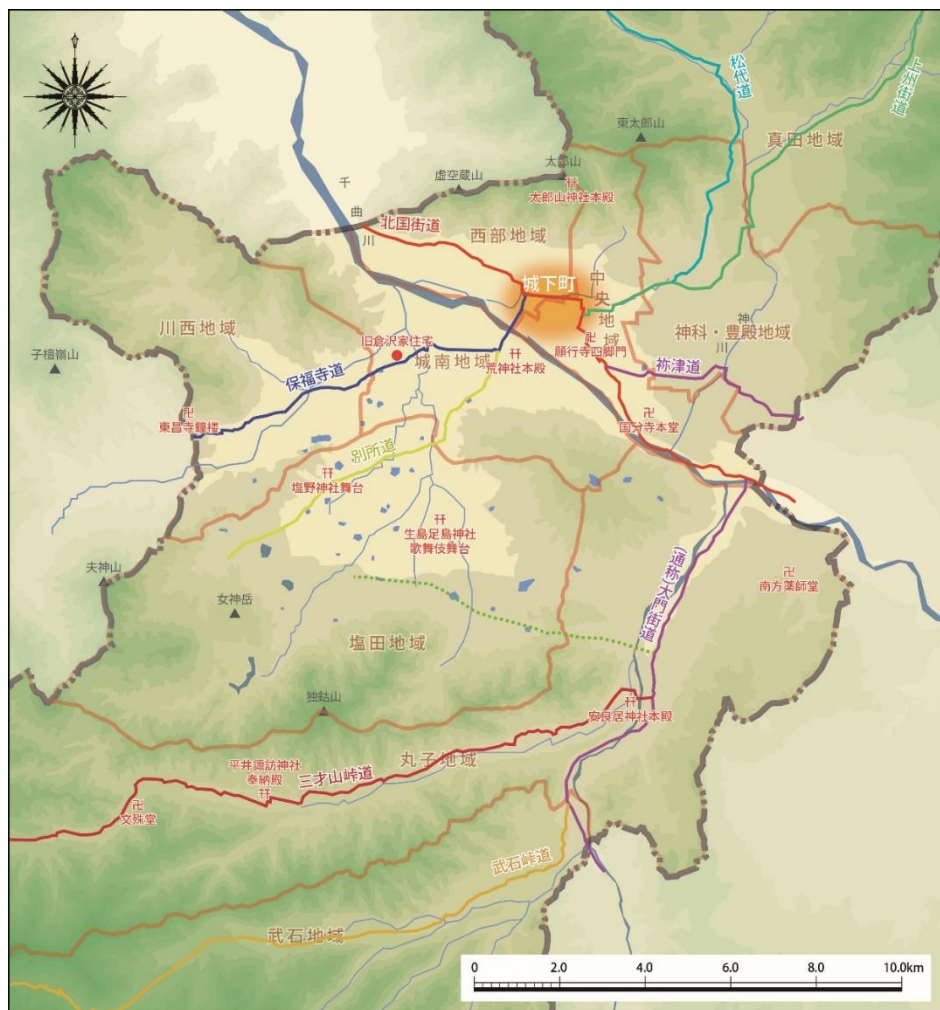
## カ. 近世

江戸時代、上田城（藩）主は真田氏（1601～1622）から仙石氏（1622～1706）、松平氏（1706～1868）と代わるが、岩村田藩や小諸藩の藩領や天領であった丸子地域の一部を除き、上田市域のほとんどは上田藩領であった。現在の上田城は寛永3年（1626）から仙石忠政が復興したもので、城下町の整備も寛永ごろまでにはおおむね完成した。

上田の城下町は、北国街道の宿駅を兼ねて、地域の経済及び流通の拠点となり、街道沿いには旅籠屋や商家が軒を連ねた。また、城下は松本に向かう保福寺道、上州に向かう上州街道、別所に向かう別所道、北国街道の北に平行して小諸に向かう祢津道などの発着点となり栄え、さまざまな産業が育った。



正保4年(1647)上田城絵図  
出典：国立公文書館デジタルアーカイブ



近世の上田（北国街道・往還と文化財）



近世には、それまで布製品の主流であった麻布の生産は次第に減少し、かわって木綿布が急速に伸びている。同時に、絹や紬は徐々に生産量を増やしている。17世紀中ごろには、上田地方の村々では絹・紬の生産の材料となる生糸を生産され、養蚕と桑の栽培が広く普及していたと考えられる。生産された繭は、生糸として上州方面に売り渡されたほか、上田紬にも利用された。この上田紬は、広く町人のあいだで常用され、全国にも送り出されたことで、上田の名産となった。養蚕のほか、上田地方では稲作栽培も行われてきた。上田地方は年間降水量が900mm前後の小雨地帯のため、堰の開削とともに新田開発は行われた。

これらの新田開発は、仙石氏の時代にほぼ終わり、それ以後は、刈畑や税のかからない見取畑など、条件の悪い土地の開発が中心となったと考えられる。ただし、千曲川沿いに位置する諏訪部村や上塩尻村・下塩尻村などのように、養蚕業や蚕の種（卵）を生産する蚕種業の成長に伴って河川敷の開発が進み例外的に新田が大幅に増加した村もある。ため池の築造は仙石氏の時代に盛んとなるが、新田開発よりは、旧来の水田の水確保が目的であった。

## キ. 近代

日本の近代化にあたり、政府は製糸業の振興に力を注ぎ、明治5年(1872)群馬県に官営富岡製糸場を設置し、製糸の機械化と大量生産をはかった。当時、長野県は全国でも有数の養蚕地域であった。上田市域においては、蚕種製造でヨーロッパをしのぐ技術を有しており、この蚕種製造技術が日本製糸業の発展の礎となっていた。

明治初期からの上田の蚕糸業は、蚕種・養蚕・製糸・絹織業が互いにかかわりあって発達した。明治6年(1873)時点の蚕種製造家は、西部地域の上塩尻が159軒と最も多く、次いで川西地域の小泉地区の115軒などとなっている。また、同年の上塩尻と下塩尻の輸出用の蚕種（蚕卵紙）は15,866枚で、小県郡全体の輸出用の蚕種は353,421枚である。日本の蚕種輸出枚数が1,418,809枚であることから、総輸出量の約25%を小県郡で製造していたことになる。



現在も残る塩尻地区の蚕種屋の家並み  
出典：上田地域千曲川自然図鑑



蚕種（蚕卵紙）

蚕種とは蚕の卵。黒く見える小さな粒が蚕種。  
産みつけた和紙（台紙）も蚕種と呼ぶ。

上田市域の近代化に、決定的な役割を果たしたのが信越本線の開通である。明治26年(1893)、信越本線は上野―直江津間が全線開通し、輸出港である横浜まで直結する輸送路が確立し、世界的な商圈の拡大につながった。また、中央地域の東部に位置する大屋駅は、北国街道と諏訪道が通る交通の要衝であり、丸子地域や諏訪地域の大量の生糸を出荷するための駅として明治29年(1896)、日本初の請願駅として開業した。

明治40年(1907)、帝国議会は国富を支える蚕糸業をさらに発展させるため、蚕糸専門学校の設立案を可決した。可決と同時に長野県への設置が内定し、県内の設置場所を巡っては、上田町とともに小県郡や上田商工会議所も加わった熱心な誘致運動により、明治41年(1908)に上田への設置が決定、明治44年(1911)に上田蚕糸専門学校(現信州大学繊維学部)が開校した。こうした蚕糸業の発達には、上田にかつてない繁栄をもたらし、後に「蚕都<sup>かいと</sup>上田」と呼ばれるようになった。

また、温泉や高原を開発する機運も盛んとなる。別所温泉は、大正6年(1917)に別所で蚕種・旅館業を営んでいた南条吉左衛門が、乾燥ゼリー菓子の「みずび飴」を製造販売する飯島商店の飯嶋新三郎らとともに花屋ホテルを創業した。大正8年(1919)には温泉へ湯治客を運ぶ別所線の建設を企図し、大正10年(1921)に開通すると、別所温泉は一気に温泉観光地として繁栄する。

菅平高原は、昭和3年(1928)に上田駅から真田地域の本原駅を経て真田・傍陽<sup>そうやう</sup>に向かう真田傍陽線(北東線)が開業すると、同年に菅平スキー場が開業するなど観光開発が進んだ。昭和5年(1930)にオーストリアのスキー指導者シュナイダーが来日し、日本の近代スキーが始まると、多くのスキー客が菅平を訪れるようになった。



昭和初年の蚕業学校

出典：蚕都上田アーカイブ



温泉宿の町並み

出典：別所温泉観光協会ウェブサイト



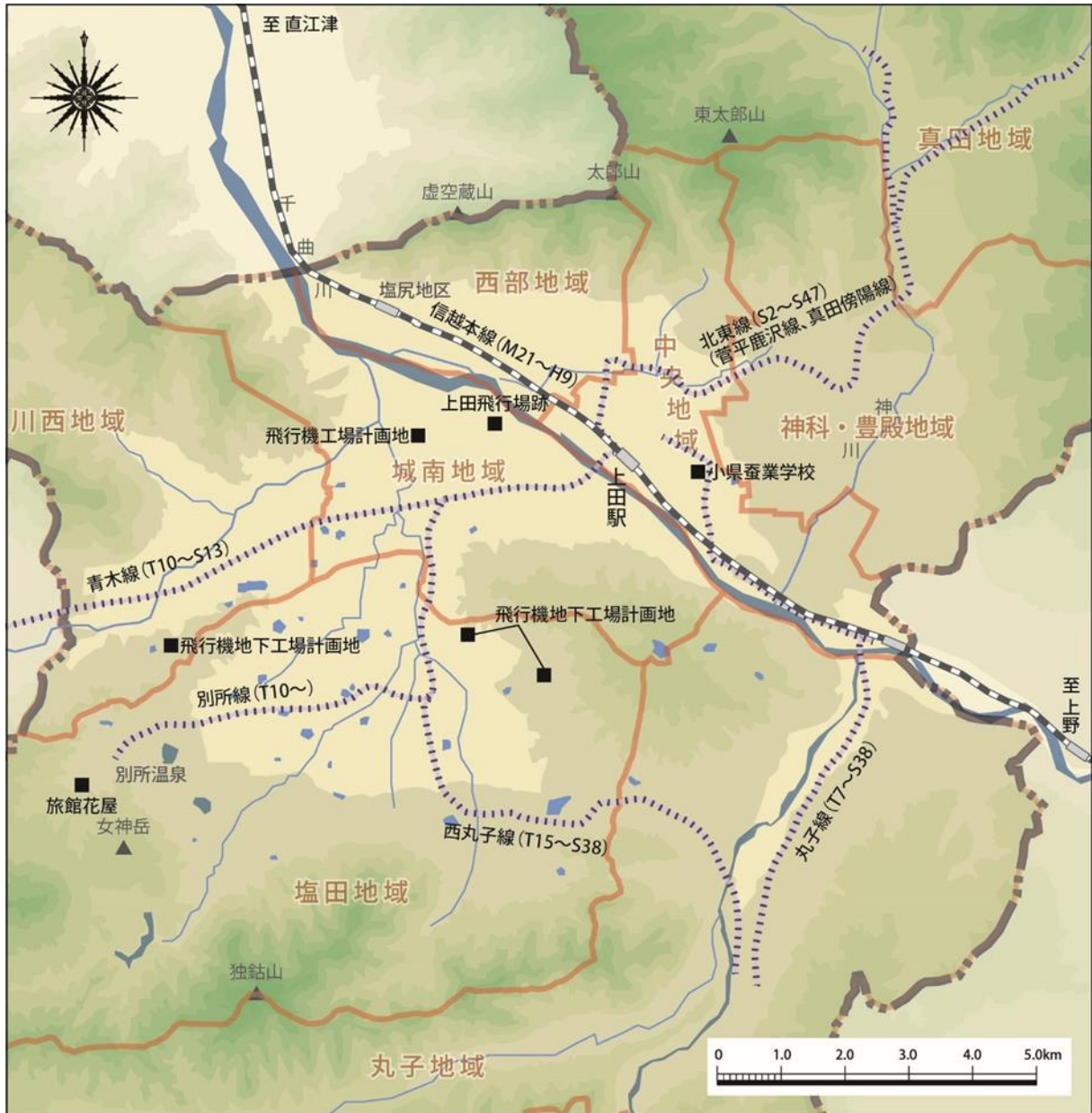
冬の菅平高原

出典：上田市ウェブサイト



こうした近代都市の発展とともに、大正時代には、金井正らが民衆の労働と結びついた自由大学運動を展開した。また、この運動を通じて、山本鼎<sup>かみえ</sup>や高倉輝<sup>てるる</sup>、倉田白羊らとの親交が始まり、農民美術運動などの新たな文化を展開した。

第二次世界大戦の戦況が悪化すると、疎開工場が上田にもつくられ、陸軍上田飛行場に供給する飛行機製造の地下工場が仁古田や東塩田の山中に造営された。



近代の上田（鉄道網）



## (2) 現在の市域

現在の市域は、平成 18 年（2006）3 月に上田市、丸子町、真田町、武石村が合併した地域であり、周囲に優れた自然環境を持つ高原リゾート、歴史的・文化的資源を有しながら、県内第 3 位の都市としての都市機能が集積した市街地からなっている。

四方を山々に囲まれた上田盆地と中心を流れる千曲川は本市の原風景であり、旧北国街道、東山道といった街道を背景に築かれた文化、そして戦国期を経て現代もなお上田の象徴でありつづける上田城を中心とした旧城下町とゆかりの建造物、さらに近代の養蚕業で繁栄した当時の建造物や家並みが残されたまちとして、さまざまな時代の風土、歴史文化、人々の生活や気質、産業や伝統性、それぞれの時代の建築物などが重層的な町並み景観を表し現在に至っている。これらの歴史的・文化的資源を保全・保存管理していくための整備計画も進められている。

なかでも、国の史跡である上田城跡は城下町上田のシンボルとして市民に親しまれ、大切に受け継がれてきている。長年にわたり整備がすすめられており、昭和初期には西櫓の修理、つづいて南櫓・北櫓の移転復旧も行われた。近年では、遺構を保存管理するとともに、廃城時の姿への復元を目的とした「史跡上田城跡整備基本計画（平成 2 年度（1990）策定）」を、上田市民や専門家による検討委員会により平成 24 年（2012）に改訂し、引き続き史跡整備に取り組んでいる。

信濃国分寺跡においては、平成 17 年（2005）に「史跡信濃国分寺跡保存整備基本計画」によって保存活用方向が定められており、発掘調査と整備事業が進められている。

旧北国街道沿いの柳町は、歴史的建築物や水路など当時の面影を数多く残しており、歴史文化等を利活用した地域づくりが、住民主体で行われている。都市計画道路の整備等を行った平成 16 年度（2004）には、住民組織が主体となりワークショップ等を開催し、整備方針や建物修景のルールなどを決め、石畳の施工や水路の復元を行うこととなった。また、地域住民もルールを守った建物修景や、まちの回遊性を高めるための案内設置なども行っている。このように歴史的な町並みを取り戻す活動を住民組織が継続的に進めており、平成 22 年度（2010）には国土交通省「手づくり郷土（ふるさと）賞」を受賞している。



信濃国分寺跡（昭和 54 年ごろ撮影  
上田小県誌刊行会蔵）

出典：上田市文化財マップ



旧北国街道沿いの  
家並みが残る柳町

出典：信州上田観光情報ウェブサイト

郊外に目を向けると、山麓の扇状地などにまとまって存在する田園地帯や果樹園、養蚕業を営んできた蚕室造りの伝統的な家屋が残る集落地などがあり、古くからの生活風景と上田の産業を支えてきた歴史的な要素を併せ持ったエリアとなっている。

市北東部に位置する<sup>とのしる</sup>殿城地区には、元禄時代から明治時代にかけて開田された棚田が広がり、その景観は平成11年（1999）農林水産省の「日本の棚田百選」にも認定された。それを契機に地元住民による組織が発足し、遊休荒廃地の伐採や草刈り等の活動が継続して行われ美しい棚田景観が見られるようになってきた。現在では棚田オーナー制度や体験学習の受け入れを行っている。



殿城地区稲倉の棚田  
出典：上田市ウェブサイト

また、塩田平は「信州の学海」と称された仏教文化に関係する寺社群と、灌漑により整備されたため池が歴史的・文化的資源として存在し、周囲の田園や山並みとが一体となった落ち着いた風景が広がる。これらのさまざまな魅力を博物館の展示物と見立て、塩田地域、川西地域、青木地域を1つの「屋根のない博物館」として紹介・活用しようとする「田園空間博物館」構想が平成11年度（1999）から行われた。農業・農村の営みを通じて育まれてきた水と土と里が織りなす地域資源を、歴史的・文化的視点から見直し、伝統的な農業施設や美しい景観として、魅力のある田園空間を生み出し、これらを地域住民が主体的に活用して歴史教育、都市との交流、自然観察、体験活動などで地域の活性化を目指すもので、交流施設、遊歩道等の整備、ため池の周囲の遊歩道や親水施設、あじさいの植栽などを行い、美しい田園風景を楽しめる空間整備を行っている。

このような日本らしい風景を保っている地域の保全・継承、地域の観光振興などを目的とした、「美しい日本の歴史的風土100選」実行委員会（古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法の施行40周年を記念し、当時の古都保存財団等からなる組織）は、平成19年（2007）、「塩田平の歴史的文化的遺産」として「美しい日本の歴史的風土準100選」に選定した。平成22年（2010）には、「塩田平のため池群」として農林水産省の「ため池百選」にも選定されている。



塩田平のため池

一方で、市街地周辺部や幹線道路沿いには、新興住宅地やロードサイド型の商業施設などの立地もみられるが、眺望が開ける沿道などは屋外広告物禁止地域に指定されるなど良好な眺望景観を保持するルールが定められている。特に、千曲ビューラインや主要地方道真田東部線沿道は屋外広告物禁止地域、国道144号の上田菅平インター付近では景観づくり協定が結ばれていることから、屋外広告物の乱立が防がれ良好な道路景観が保たれている。なお、市内の各地域の美しい自然や歴史と文化が生きる魅力ある景観づくりをより効果的に進めていくため、平成24年(2012)、景観法に基づく「上田市景観計画」が策定されている。

また、新生上田市のまちづくりの核として、平成26年(2014)、旧日本たばこ産業の工場跡地に文化・芸術の交流施設となる「サントミュージゼ」(上田市交流文化芸術センター・市立美術館)が開館した。中心市街地から線路を挟んで千曲川沿いのまとまった土地を用途変更し、「公共施設の街なか立地による拠点性・求心力の向上」、「他地域や郊外に流れている消費者を呼び戻すための商業集積・魅力づくり」、「良好な住環境の創出による街なか定住人口の確保」によるまちづくりを誘導したものである。



サントミュージゼ



### (3) 上田市の歴史文化に関わりのある主な人物

上田地域は、戦国時代から、江戸時代を経て、近現代に至るまで、多くの人々の尽力により発展してきた。(以下「上田を支えた人々～上田人物伝」を参考)

ア. 近世

#### ●真田 昌幸 (さなだ まさゆき) 1547-1611

徳川の大軍を2度にわたり撃退した知略の名将。

真田安房守昌幸は、小県地方を統一し、天正11年(1583)の上田城築城に関与し、現在の上田市中心市街地の原型となる城下町をつくった。上田市にとっては生みの親ともいえる名将である。



父真田幸隆(幸綱)が武田信玄に従ったため、三男の源五郎(昌幸)は7歳で甲斐の信玄の元に仕え、のちに甲斐の武将となる。天正3年(1575)5月、2人の兄信綱・昌輝は設楽原の激戦で討ち死にしたため、真田家を継ぐこととなり、真田昌幸と名乗ることとなる。信玄の死後に家督を継いだ武田勝頼の重臣の1人として、北上州の経営・防備を担当していたが、天正10年(1582)武田氏が織田信長により滅亡、信長が本能寺の変で死去したことから、信濃国は上杉・北条・徳川の勢力の草刈り場と化した。昌幸はこうした情勢のなかで勢力拡大を図り、上田城を築いた。2年後の天正13年(1585)閏8月、第一次上田合戦による徳川軍の攻撃を撃退、慶長5年(1600)9月、関ヶ原合戦に伴う第二次上田合戦でも昌幸と次男幸村は上田城に立てこもり、徳川秀忠の大軍を翻弄し、関ヶ原への着陣を遅らせた。

#### ●真田 信之 (さなだ のぶゆき) 1566-1658

上田藩・松代藩の基礎を固めた名君。

真田昌幸の長男で、天正10年(1582)の武田氏滅亡後の混乱の中で、懸命の働きをしたと伝えられている。

第一次上田合戦では父昌幸とともに戦い、勝利に貢献している。その後、昌幸は豊臣秀吉に臣従し、幸村を秀吉に出仕させる一方、徳川家康の配下となったことから、信之を家康に出仕させた。



天正18年(1590)の小田原の役後は、昌幸が上田城主として上田領を支配し、信之は沼田城主として北上州を支配した。慶長5年(1600)の関ヶ原合戦に伴う第二次上田合戦では東軍(徳川方)につき、西軍(豊臣方)についた昌幸・幸村の立てこもる上田城を攻めた。関ヶ原合戦後は、昌幸の領地上田領も徳川方についた信之に与えられた。また、昌幸と幸村が死罪を免れ高野山へ配流となるだけで済んだのは、信之とその妻小松姫(家康の重臣本多忠勝の娘)の嘆願によるものであった。

関ヶ原合戦後の上田城は、本丸・二の丸といった中心部は破却された。信之は現在の上田高等学校の地に藩主屋敷を設け、城下町の拡張整備に努めた。上田の城下町は、信之の時代にその大部分ができた。

信之は、農村についても、農民が逃亡することのないように年貢の減免措置を行い、耕作放棄地を減らす政策をとったほか、用水堰の開削やため池の築造を行い灌漑施設の整備を進めるなどの事業を行った。

元和8年(1622)、信之は松代に領地替えとなり、明暦3年(1657)に92歳という高齢で隠居するまで藩主の地位にあり、真田松代藩の礎を築いた。

### ●真田 信繁 (幸村) (さなだ のぶしげ (ゆきむら)) 1567-1615

徳川家康を苦しめた知勇兼備の戦国武将。

真田昌幸の次男であり、一般には幸村として知られている。織田信長が横死する混乱期に昌幸は戦国大名として自立の道を歩むが、天正13年(1585)徳川家康と対立した昌幸は越後の上杉景勝に助けを求め人質として幸村を差し出す。また昌幸は家康に対抗するために豊臣秀吉にも援助を求め、天正14年(1586)幸村を秀吉に出仕させて臣従した。その後、秀吉に従い、天正18年(1590)の小田原の役、文禄元年(1592)の朝鮮出兵にも出陣した。



慶長5年(1600)9月の第二次上田合戦では、兄信之は東軍(徳川方)に従い、父昌幸と幸村は西軍(豊臣方)として上田城に立てこもった。昌幸と幸村の奮闘は、真田の武名を一段と上げることになったが、豊臣方が関ヶ原合戦で惨敗したため、父子は高野山に配流となった。

幸村はその後、慶長19年(1614)の大坂冬の陣で五千余の兵を率いて活躍、慶長20年(1615)の大坂夏の陣でも奮闘した。最後の決戦となった5月7日には、孤軍奮闘し、家康の本陣めがけて3度突進したが、力及ばず討ち死にを遂げた。この真田幸村の壮絶な戦いには、「真田<sup>ひの</sup>日本一の<sup>つわもの</sup>兵、古より物語にもこれなき由」(『後藤薩摩旧雑録』)と敵方からも賛辞がおくられている。

### ●小松姫 (こまつひめ) 1573-1620

初代上田藩主真田信之の妻

徳川四天王の一人本多忠勝の長女として生まれ、17歳の時に徳川家康の養女となりその頃家康の与力大名となっていた真田昌幸の長男信之に嫁いだ。

才色兼備の女性だったと伝えられ、家康や秀忠にも直に意見するほど勝気な女性だったとされる。関ヶ原の合戦の際に西軍に味方するため真田昌幸と信繁が上田城に戻る途中で小松姫が留守番をする沼田城へ入ろうとしたところ、「いかに親子であっても門を開けることはできない」と<sup>なまなた</sup>雑刀を持ち武装した小松姫が拒否した。などの逸話もある。





関ヶ原の合戦後に昌幸、信繁の助命嘆願をしたり、手紙を送るなどの気遣いを見せる。信之の正室としても真田家を支えたとされ、亡くなった際には信之が「わが家の灯が消えたり」と悲しんだとされる。墓は芳泉寺のほか、沼田の正覚寺、埼玉県鴻巣市の勝願寺に建てられた。

### ●仙石 忠政（せんごく ただまさ）1578-1628

上田城を復興した藩主。

父、仙石秀久とともに慶長5年（1600）には徳川勢の一員として第二次上田合戦で上田城攻撃に加わっている。

仙石忠政は、慶長19年（1614）に死去した秀久の跡を継いで小諸城主となったが、元和8年（1622）に上田に移封となる。それまで信濃国の中世以来の勢力であった真田氏が支配していた上田を中心とする小県郡は、中世の農村支配体制が色濃く残っていたが、全く新しい領主仙石氏に替わったことから、完全に武士と農民の分離が行われ、近世（江戸時代）的な支配体制が完成することとなった。



忠政は、農村だけでなく、上田城及び城下町の整備にも力を入れた。上田城は慶長5年（1600）の関ヶ原合戦後に取り壊されており、真田信之は復興しなかった。忠政は、移封の際に将軍徳川秀忠から破却されたままの上田城の修理料として銀子を与えられ、寛永3年（1626）に幕府の正式な許可のもと復興事業を行う。復興にあたっては、埋められた堀を再び掘り上げて元通りに復元していることから、真田氏当時の上田城を復興したものと思われる。しかし、忠政は2年後の寛永5年（1628）病没し、上田城復興の普請は中断された。そのため、本丸には石垣と隅櫓及び櫓門は築かれたが、二の丸には門もなく櫓などの建物も設けられなかった。その姿は今日に至るまで、上田城の、そして上田市のシンボルとして伝わっている。

### ●松平 忠周（まつだいら ただちか）1661-1728

幕府の老中も務めた松平氏最初の上田藩主。

松平氏は、江戸時代中期から明治維新に至るまで、160余年にわたって上田を治めた。

忠周は、丹波亀山の藩主松平忠晴の子として生まれ、天和3年（1683）には兄忠昭の死去により亀山藩主となり、貞享2年（1685）には24歳の若さで若年寄に昇進、その直後に五代将軍徳川綱吉の側用人に登用されるなど、幕府の重臣として活躍し、有能な人物であった。その後、亀山から武蔵国岩槻、但馬国出石へ移封、宝永3年（1706）に信濃国上田へ五万八千石で移封を命ぜられた。



●松平 忠優（忠固）（まつだいら ただます（ただかた））1812-1859

鎖国を打ち破り開国を唱えた幕末の英傑。

忠優は、文政12年（1829）に上田藩主松平忠学<sup>きょう</sup>の婿養子となり、天保元年（1830）の忠学の隠居に伴い19歳で第6代上田藩主となった。忠優は、上田に産物会所をつくり、上田縞の改良・品質向上を図り、販路を広げ、養蚕業を奨励した。弘化2年（1845）に34歳で大坂城代となつてからも大坂難波橋のもとに上田産物売捌所を設置して上田縞や上田紬などの販路を広げた。



嘉永元年（1848）5月に、忠優は37歳で老中に就き海防掛となったこのころ、わが国の沿岸近くにイギリス・フランス・アメリカ・ロシアなどの船がしきりに現れるようになり、アメリカのペリーが開国を求めてきた。忠優は穩便・開国論を主張したが、鎖国・攘夷論の徳川斉昭と対立、その後安政元年（1854）に日米和親条約が、安政5年（1858）に日米修好通商条約が結ばれた調印時にいずれも老中を務めていた。徳川斉昭と対立しながらも幕府内で開国を主張し、重要な局面であったこの時期を牽引したひとりでもあった。

## イ. 近代

### ●藤本 善右衛門 (ふじもと ぜんえもん) (縄葛) 1815-1890

長野県蚕種業者の代表

上塩尻村(現上田市)の佐藤一族の総本家は、江戸時代前期の中ごろから代々蚕種の製造・販売業を営んでおり、「藤本」を屋号としていた。当主は代々善右衛門を襲名しており、歴代養蚕業の発展に寄与してきた。善右衛門綱葛(1815～1890)は、養蚕業普及発展のため塾を開き、弘化年間(1844～1848)には、新品種「掛合」(信州かなす)を育成、幕末期から明治初年の蚕種輸出の大変盛んだった時期に大流行した品種となり、この地域を全国一蚕種業地帯の名を確実なものとした。明治3年(1870)には蚕種輸出組合「妙妙連」(のちの均業社)を組織し大々的に輸出、5年には長野県の蚕種大総代となり、蚕種に関する諸条例、規則などの策定に尽力した。



### ●佐藤 八郎右衛門 (さとう はちろうえもん) 1846-1909

蚕種業の功労者・衆議院議員。

小県郡上塩尻村(現上田市)の蚕種家に生まれ、11歳のときに父を失い、次の年、家を火災で失うという不幸にもあったが、父から受け継いだ蚕種業に励んだ。

江戸時代の末(1840年ごろ)、ヨーロッパでは微粒子病という蚕の伝染病が大流行し、フランスやイタリアは大きな打撃を受けて1866年ごろには蚕が全滅しそうになる。そこで病気に冒されていない日本の蚕種を求め、日本国内の蚕種輸出ブームが起き、蚕種が飛ぶように売れた。しかし、日本の販売価格より高く即金で取引されたため、目先の利益を追い求め、不良の蚕種や菜種を蚕種に見せかけたりする悪徳な業者が多くおり、ヨーロッパの蚕の病気が治まってきた明治7年(1874)以降、相場が崩れ蚕種の価格は下がった。このようななか、上田小県地方の蚕種業者は、政府や県には影響されない組織を立ち上げ、粗製濫造を防ぎ、良い蚕種を造ろうと努力した。

明治6年(1873)、上塩尻村に優良蚕種の製造を目指した「均業社」が設立され、社長に八郎右衛門が就任した。これに端を発し、上田小県地方には20を超える組合組織が生まれた。明治8年(1875)に開局した蚕種製造組合会会議局東京蚕種取締所委員になったほか、明治29年(1896)には、信濃蚕種業組合長となり長野県の蚕種業発展のために尽力し続けた。

八郎右衛門は、蚕種業の発展を願いながら政治の世界でも活躍した。県議会では県会議長、国政の場では蚕種検査法、養蚕奨励法案などの立法化に奔走し、蚕糸業の振興のために力を注いだ。





●工藤 善助 (くどう ぜんすけ) 1858-1938

蚕糸業界育成に尽くした政治家。

下村亀三郎らと生糸共同組合依田社を創立し、小県郡依田窪地方製糸業の基礎を築いた。信濃蚕種業組合創立とともに副組合長となり、明治33年(1900)長野県蚕種同業組合連合会の議長、明治36年(1903)には同会会長となる。一方政治面でも県議会、衆議院議員を務めた。

その後は政界を退き、依田社社長、依田銀行頭取、帝国蚕糸株式会社、信濃絹糸紡績株式会社、信濃電気株式会社、上田蚕種株式会社、丸子鉄道株式会社などの重役も務めた。



●小島 大治郎 (こじま だいじろう) 1859-1929

上田温泉電軌の創設者。

小島大治郎の生家は、代々勅許鋳物師で寺社の御用を務め、その名は江戸表まで知られていた。明治8年(1875)、17歳のときに父の急死により家督を継ぎ、屋号「鍋大」の名声を守った。

大正初期の川西地区は、千曲川を隔てていたため電気動力の引き込みがなく、事業を興せずにはいたが、大治郎の助力を得て大正7年(1918)に動力の引き込みに成功。これに地元も力を得て、次に電車鉄道開設の運動を起こし、大正8年(1919)に資本金60万円の上田温泉電軌株式会社を発足させ、翌年には自ら社長となり鉄道建設に情熱を注いだ。



大正10年(1921)6月、三好町から青木、別所温泉への運行が開始、今の上田駅から乗降ができるようになったのは千曲川鉄橋の架設が大正13年(1924)に完成してからである。丸子鉄道は、大屋までだったのを上田につなげるため西丸子線の計画を立て、大正15年(1926)に運転を開始。さらに北東線は大正12年末から地元の人々の運動が起こり、従来の軌道法ではなく地方鉄道法によって進める計画は、不況のなか、株式の募集や用地買収、路線決定など幾多の苦労を重ね、ようやく昭和2年(1927)に上田-伊勢山間が開通し、翌年1月に本原まで、同年4月に本原-傍陽間が、同年5月に長村真田まで開通し、ようやく全線の運行が開始された。

●三吉 米熊 (みよし よねくま) 1860-1927

近代日本の養蚕教育の先駆者・農業博士。

内務省勸農局の駒場農学校(現:東大農学部)にて農学全般、無機・有機化学並びに定量分析等を習得し卒業後、明治14年(1881)長野県に就職し、勸業課農務係を命ぜられる。自ら積極的に蚕糸業・養蚕業の技術・知識を学び、県下各地の伝習所・講習所で講師を務め、明治22年(1889)から2年間にわたりフランスなどで視察・研修を行った。

当時、養蚕教育の必要性から小県郡長中島精一が蚕業学校設立を提唱、議会で設立案可決の2ヵ月後、明治25年(1892)5月に小県郡立蚕業学校が開校し、外遊から帰国したばかりの三吉は初代校長に就任し昭和2年(1927)68歳で亡くなるまで同校の教育に携わった。その間、上田蚕糸専門学校の創立委員・同行教授を併任、大正14年(1925)には蚕糸教育の功績によって勲三等瑞宝章が授与された。



●笠原 善吉 (かさハラ ぜんきち) 1886-1953

近代製糸業界を支え発展に尽くした人物。

諏訪郡平野村(現岡谷市)で製糸業を営んでいた笠原善吉の父は、明治33年(1900)3月、事業拡大のために上田に「常田館製糸場」(120釜)を設立、善吉は22歳の明治40年(1907)5月、常田館の経営管理一切を任せられ、520釜の工場経営者となった。創業の翌年、明治34年(1901)には、上田で第一の釜数(196釜)を持つ工場となり、以来規模を拡大し、上田の製糸業といえば「常田館」で代表するようになった。



大正11年(1922)には欧米の絹業視察の一員として参加し、海外へも目を向け、特に生糸相場に注意を払い、浮き沈みの多かった製糸業においても健全な工場経営を行った。太平洋戦争で中断していた製糸業の復活にもいち早く取り組んだ。昭和23年(1948)笠原製糸株式会社と社名変更。家業の製糸

業経営とともに製糸業関係の役職、上田養蚕組合の理事をはじめ各方面の仕事にも携わった。

## 4. 指定等文化財

### (1) 文化財の指定状況

上田市には、令和4年(2022)1月現在、国宝を含む国指定・選定・登録等の文化財が41件、長野県指定文化財(選択含む)は29件、上田市指定文化財は235件、合計で305件である。その内訳その内容は以下の表のとおりである。

文化財種別件数(令和4年4月1日現在)

種類		国		県	市	計
		指定	登録	指定	指定	
有形文化財	建造物	7	14	10	38	69
	絵画	0	0	2	9	11
	彫刻	4	0	4	22	30
	工芸品	1	0	3	19	23
	書跡・典籍	0	0	0	3	3
	古文書	1	0	0	19	20
	考古資料	0	0	2	7	9
	歴史資料	1	0	0	4	5
無形文化財		0	0	0	4	4
民俗文化財	有形の民俗文化財	1	0	0	14	15
	無形の民俗文化財	0	0	0	14	14
記念物	遺跡	3	0	4	45	52
	名勝地	0	0	0	7	7
	動物、植物、地質鉱物	3	0	3	30	36
計		21	14	28	235	298

種類	国選択	県選択	
記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	3	1	※指定との重複含む

種類		国認定
重要美術品	絵画	1
	書跡	2



#### ア. 国指定・選択・登録等の文化財

国宝を含む国指定・選択の文化財が 21 件あり、これらの種別としては重要文化財（建造物・美術工芸品）、重要有形民俗文化財、史跡、天然記念物に指定されている。このうち最も多いのが重要文化財（建造物）である。特に鎌倉時代から室町時代にかけての寺院建築が塩田地域に集中していることが特徴で、その代表的なものが国宝安楽寺八角三重塔である。

指定文化財以外には、登録有形文化財（建造物）が 14 件、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財が 3 件、重要美術品が 3 件ある。登録文化財建造物は、近世末から昭和初期にかけて建設された、蚕都上田の繁栄を伝える事例が多い。なお、昭和 25 年（1950）の文化財保護法施行に伴い廃止された旧法「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」により認定を受けた重要美術品については、現在も効力を有するものである。

#### イ. 県指定・選定文化財

長野県文化財保護条例に基づき、県宝（有形文化財）21 件、長野県史跡 4 件、長野県天然記念物 3 件が指定されている。平安時代末期から中世の寺院建築や石造物・仏像等の仏教文化財と中世から近世の櫓や城跡等の城郭文化財が多いことが特徴となっている。無形文化財と民俗文化財の指定事例はない。

また、県条例には選定保存技術の制度があるが、上田市内の事例はない。無形民俗文化財の選択制度もあり、「別所岳の<sup>のぼ</sup>りの習俗」が含まれている。

#### ウ. 市指定・選定文化財

上田市文化財保護条例に基づき、有形文化財 121 件、無形文化財 4 件、民俗文化財 28 件、史跡名勝天然記念物 82 件が指定されている。このうち、有形文化財については、中・近世の仏教関係の建造物や彫刻・美術工芸品が多い。また、無形文化財や無形民俗文化財指定の三頭獅子は、関東から東北地方に多い一人立ちの三匹獅子舞で、長野県内でも東信地方にのみ伝承している。史跡については古墳や墓所が多い。また、条例には、選定保存技術の制度があるが、事例はない。

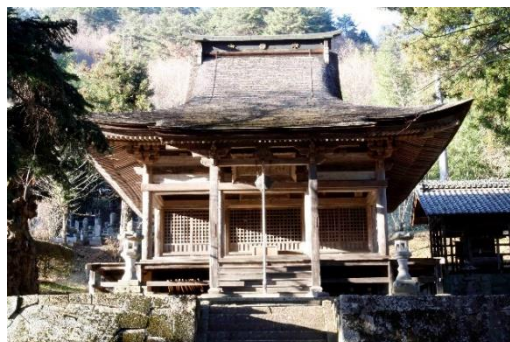
なお、上田市文化財保護条例は平成 18 年(2006)3 月 6 日に施行されたもので、合併前の上田市文化財保護条例（昭和 62 年（1987）上田市条例第 18 号）、丸子町文化財保護条例（昭和 40 年（1965）丸子町条例第 47 号）、真田町文化財保護条例（昭和 45（1970）年真田町条例第 9 号）又は武石村文化財保護条例（昭和 43 年（1968）武石村条例第 5 号）の規定に基づき、指定された文化財を継承している。

## (2) 主な文化財

### ア. 国指定文化財

#### (ア) 法住寺虚空蔵堂 (重要文化財 (建造物)、丸子地域)

平安時代に創建されたと伝えられる天台宗の古刹・法住寺の信仰の中心。堂名の虚空蔵は集落名になるほど地域信仰の中心とされてきた。屋根は入母屋造こけら葺で、棟の両側にはいかつい鬼の面、鬼板がついている。建物は正面に4本、側面に5本の柱があり、奥行の長い長方形となっているのは、虚空蔵菩薩像が安置されている内陣に参詣者の参拝する外陣がついているためで、内陣と外陣の間



法住寺虚空蔵堂

は格子戸でしきられている。室町時代中ごろに造られたものと考えられ、大正11年(1922)4月13日に国の重要文化財に指定。依田窪地方最古の建物である。

#### (イ) 小文地桐紋付韋胴服 (重要文化財 (工芸品)、中央地域)

鹿鞆仕立ての胴着で、寸法は身丈89.0cm、肩幅70.5cm、袖幅31.5cm、袖丈45.5cm、衿幅13.5cmであり、背1枚、前身頃各1枚の白鹿韋五三桐紋を7ヶ所に付す。表は小文染韋。織田信長が永禄11年(1568)近江国箕作城を攻撃したおり、徳川家康よりの援軍として参戦、活躍した藤井松平氏2代信一の戦功を賞して信長自ら着用していた革の羽織を脱ぎ、与えたと伝える革羽織(韋胴服)。巧みな模様

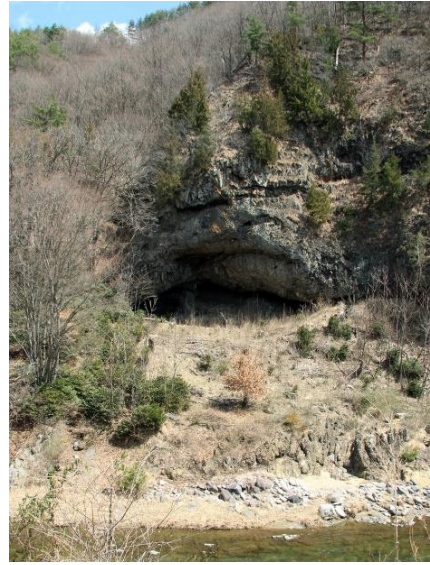


小文地桐紋付韋胴服

割付けと優れた型付けの技法に加え、小紋染衣服の最も古い資料のひとつであり、室町時代の韋製服飾資料としても貴重なものであるとして昭和51年(1976)6月5日に国の重要文化財に指定。

(ウ) 鳥羽山洞窟（史跡、丸子地域）

腰越地区名勝「飛魚」付近の岩肌にある洞窟。川底から15mの高さにあり、幅25m、奥行約15mの大きさ。古墳時代中期（5世紀中ごろ）に古墳を築かなかつた人々の葬所として使われており、洞窟内は依田川の河原石が4段に敷かれ、石敷をした平らな部分に死体が置かれていた。葬法は曝葬と呼ばれ、沖繩や東南アジアにかけて、よく似た葬法（崖葬）が行われているが、大変珍しいものである。洞窟内からは多くの人骨や研究上非常に貴重なものとされる副葬品が発見され、出土遺物は現在丸子郷土博物館に常時展示されている。昭和53年（1978）1月27日に国の史跡に指定。



鳥羽山洞窟

(エ) 四阿山の的岩（天然記念物、真田地域）

鳥居峠登山口から四阿山頂へと続く尾根の中腹にある複輝石安山岩の大岩。的岩又は屏風岩ともいわれる。岩脈は幅2~3m、高さ200mにおよび、側壁に垂直に柱状節理が発達し、多くは六角柱状の俵を積み重ねたような奇妙な形である。眺めは壮観。その昔、善光寺参詣の途中に菅平を訪れた源頼朝が、巻狩りを楽しみ、自慢の弓を披露した際、矢を命中させたといわれる大岩が的岩であるという伝説が残る。昭和15年（1940）2月10日に国の天然記念物に指定。



四阿山の的岩



## イ. 国登録有形文化財

### (ア) 旧常田幼稚園園舎（建造物、中央地域）

明治40年（1907）に創設し、昭和50年（1975）に廃園。現在はカルディア会常田保育園の園舎として使われている。設立者はミス・ハート氏。大正7年（1918）に建築家W.M.ヴォーリズ（1880～1964）によって設計された建築で図面には「信州上田市ハート氏幼稚園」と当時の園長名が記されている。園舎は、間口9間、奥行4間の木造2階建の建物で、外壁はスタッコ仕上げ、屋根は切妻造、棧瓦葺である。前面中央に八角形の3辺を張り出したような突出部があり、背面にも2間幅の下屋を設けている。この建物は県内に残るヴォーリズの建築作品としては初期の作品。平成15年（2003）7月1日に国の有形文化財に登録。



旧常田幼稚園園舎

### (イ) 花屋ホテル本館他（建造物、塩田地域）

(株)花屋ホテルは蚕種製造業を営み衆議院議員も務めた南条吉左衛門を長とし、みすゞ飴を開発した飯島新三郎らが参画して大正5年（1916）に別所新温泉株式会社を設立したことに始まる。

湯川の南側斜面に敷地があり、平坦な場所に主要な建物、南側の一段高い位置に戦後の宿泊棟が配置されている。建物群は、中央に玄関・事務・調理棟、その背後に大浴室、正面向か



花屋ホテル

って右側に「お城」と呼ぶ客室とその奥に本館がある。大浴室の前面には池のある庭園と脇に水車小屋も設けられており、この中庭を囲むように渡り廊下で繋がった宿泊棟が配置されている。建設は大正5年（1916）に大浴室から始まり、玄関・帳場、本館が開業の大正7年（1918）までに順次建設された。これらの建築には地元の大工西島保蔵・敏雄父子が関わっており、全体として意匠に統一感が感じられる。花屋ホテルの建物群は、大正・昭和前期の温泉旅館の形態をよく示しているといえ、平成18年（2006）10月18日に国の有形文化財に登録。

## ウ. 県指定文化財

### (ア) 木造十一面観音菩薩立像 (県宝 (彫刻)、真田地域)

像高 103.7cm、木造割矧造<sup>わりはぎづくり</sup>、現状は素地だがもとは檀色ないし素地仕上げで一部彩色されていたとみられる。本像は割矧造、内刳りという構造に加えて、胸厚、腹厚が比較的薄く、衣文が浅く定型化され始めていることから、定朝様を経た平安後期 12 世紀に入ってから入ったの作と考えられる。背面を省略的に彫出する点やノミ目を多く残した仕様は、当代の神像や本地仏(神仏習合思想のもとでの神の化身としての仏)にしばしば見られるところで、本像も本地仏であったと考えられる。敢えて檀像風の趣を呈しているが作風は都ぶりで、均整のとれた体型、やや沈鬱な面貌は京都・法金剛院阿弥陀如来坐像(1140 年ごろ)、滋賀・金體寺阿弥陀三尊像脇侍(1142 年)に通じ、畿内中央の様式を受けた、第 2～第 3 四半期ごろの制作と考えられる。全国的にも白山本地仏としての十一面観音像は数が少なく、四阿山・白山信仰の歴史を考える上で貴重な資料である。平成 30 年(2018)2 月 13 日に県の文化財に指定。



木造十一面観音菩薩立像

### (イ) 砥石・米山城跡 (史跡、上田地域)

上田・小県<sup>ちいさがた</sup>地方には数多くの山城跡があるが、戦国時代 4 度も対決が行われた城は砥石城の他には見当たらない上、真田氏の発展にとっても極めて重要な意味を持った山城である。天文 19 年(1550)甲斐(山梨県)の武田信玄は、村上義清(坂城の葛尾城主<sup>かづらお</sup>)の守る砥石城を、大軍をもって 1 ヶ月余攻めるも、堅固な山城を攻略できずに敗退。その翌年、武田氏配下の真田幸隆が得意の戦略により砥石城



砥石・米山城跡

の乗っ取りに成功する。天正 13 年(1585)の第一次上田合戦の際には昌幸の長男信幸(之)が上田城の背後をおさえる大事な砥石城の守りを固めた。慶長 5 年(1600)第二次上田合戦の時、昌幸の二男信繁(幸村)が立てこもるも、後に徳

川に味方した信幸が入城することとなる。このように上田盆地の北半分のおさえであった砥石城は村上・武田、真田・徳川らの争いの場になった。砥石城跡は、上田盆地の北東にそびえる東太郎山の尾根先を利用して築かれ、東は神川沿いの切り立った崖、西は急坂続きの斜面で、麓に展開する旧神科村畑山・伊勢山・金剛寺の3集落にまたがるスケールの大きい山城群である。一番広大な本城を中心に北に柵形城、南に砥石城、西南方に米山城があり、この4城をまとめて砥石・米山城跡という。昭和44年（1969）5月15日に県の史跡に指定。

## エ. 市指定文化財

### (ア) 尾野山木造千手観音立像（有形文化財（彫刻）、丸子地域）

総高318cm、像高230cmの十一面四十二臂像。建立年月は不祥だが、本尊は木造の十一面観音立像で、龍尾山龍泉寺の別当所。観音堂は何回も再建・修理が行われて今日に至る。この千手観音像は伝承によると落雷防災の神であるとされている。祭日は春と夏に行われ、夏祭りには龍泉寺住職による護摩供養が行われる。露店も店開きし、リンゴ市として参拝者が後を絶たないほど盛大に行われていた(出典：丸子町民俗行事集ほか)。現在は毎年夏に1回、尾野山自治会の小りんご祭りの際に御開帳される他、通常は予約にて見学が可能。昭和47年（1972）7月1日に市の有形文化財に指定。



尾野山木造千手観音立像

### (イ) 菅平湿原のクロサンショウウオ（天然記念物、真田地域）

菅平湿原の水中にはクロサンショウウオが生息している。体長9～14cmで、高地の湖沼に棲む黒色サンショウウオ、オオサンショウウオ科。毎年4月上旬～中旬にかけて湿原の水たまりに、アケビの果実のような形で数10個の卵を収めた白色不透明の卵のうを産む。多くのサンショウウオの卵は透明で、同じ両生類のカエルとは卵の形が異なるため、見分けることができる。昭和47年（1972）4月1日に市の天然記念物に指定。



菅平湿原のクロサンショウウオ



## オ. 主な未指定文化財

### (ア) 吉田堰 (神科・豊殿地域)

上田市とその周辺地域を流れる複数の千曲川の支流のなかでも、特に多くの水を運んでいるのが神川である。神川の豊かな水は、昔から飲み水や農作物を育てるための水として、人々の暮らしを支えてきた。現在も9つの堰が周辺の人々の暮らしを支えており、そのうち一番大きい堰が吉田堰とされる。



吉田堰

吉田堰は本流の長さだけでも12kmになり、真田町石舟地区にある頭首工から水を引き込み、真田町長・本原地区の一部と上田市殿城・芳田を通して東御市の深井・海野へと行き着く。この堰に流れている水が潤している田畑の面積は、昭和30年代前半には500haであったが、平成8年(1996)現在で約300haまで減少した。年間降水量が少なく、上流に大きな水源のなかった旧豊里村(現：芳田周辺)より下流地域の人たちにとっては命の水として大切にされてきた。記録を証明する文章やものが出てきていないため、はっきりとは分からないが、吉田堰の利用が始まった年代は『小縣郡年表』では、「養老元年(717)に開く」とし、『小県郡誌』では、「奈良朝後期か平安初期かの時代」とされている。吉田堰は、山裾を等高線にほぼ並行して流れる横堰であり、川を流れる大水が分断する形で直撃するため、大雨のたびに破壊されていた。昭和43年(1968)の神川沿岸土地改良区による大改修まで、ほとんど毎年のように被害を受けており、多くの人手や経費が必要で管理が大変な堰のなかでも吉田堰は特に大変であったと伝えられる。

(イ) 藤原田の養蚕家屋群（丸子地域）

藤原田は幕末から昭和初期にかけて養蚕・蚕種・製糸で栄えた村である。千曲川を挟んで東御市と接する東北に開けた台地上に位置する集落からは、浅間山を正面に望むことができる。この集落は小諸藩黒沢家による寛文2年（1662）ごろからの堰開墾事業によって多くの新田が開かれた。



藤原田の養蚕家屋群

黒沢照夫宅には小諸藩主を迎えた奥屋敷が中門を隔てて現存し、明治になってからは奥屋敷横の母屋で養蚕もしていたという。幕末

から明治にかけて堀内庄作・堀内萬蔵両家では生糸を前橋や横浜方面へ出荷していたが、この糸荷は両家で製造された生糸だけでなく、塩川村を中心とした周辺の村々から集めた座繰糸だった。藤原田では幕末明治初期に養蚕・製糸で財を成した家の多くが、明治中期から大正にかけて気抜けを乗せた大きな家を建てたが、養蚕技術の向上により繭の出荷量は伸び、蚕室をさらに改良、屋敷全体も豪華なものとなっていく。多くの蚕室が残るなか、堀内千春・堀内孝之・黒沢照夫・堀内成雄・堀内正次の各宅は『上田のすてき 100』に写真が掲載された。

丸子町長を務めた堀内憲明氏の蚕室は壁面にも「気抜きの小窓」をいくつか持つ二階造りが特徴。気抜き屋根ものせられていたが、昭和40年（1965）ごろの改築で取り除かれた。2階の太い梁には「大正八年新潟県三島郡大工棟梁」の墨書が残されている。棟梁は蚕室を建てたあと、藤森組に職を得てこの地に永住したと伝えられる。門も兼ねた壁面小窓付専用蚕室が大正8年（1919）に建てられたことを考えると、養蚕技術の進歩が蚕室造りにも及んでいた例として貴重な建物である。憲明宅では専用蚕室が造られるまでは母屋で養蚕を営んでおり、戸隠村から雇った人が住みこんでいたという部屋もある大養蚕農家であった。蚕室の2階には、良い繭をより多く産出したいという願いをもって技術改良に励んだあとを示す蚕具などが残る。なお、憲明宅の屋敷内には、土蔵のほか、落とし板を持つ刳蔵や屋根に覆われた井戸など、今ではめずらしくなった建築物等が大切に保存されている。

カ. 日本遺産（令和2年（2020）6月認定）

レイラインがつなぐ「太陽と大地の聖地」物語 ～龍と生きるまち信州上田・塩田平～

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が「日本遺産（Japan Heritage）」に認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に戦略的に発信することにより、地域の活性化を図るもので、平成27年度から令和2年度にかけて全国で104件が認定されている。

上田市では令和2年(2020)6月に地域型として認定された。信濃国分寺から生島足島神社、別所温泉を通るレイライン（夏至の朝、太陽が日の出の際に地上につくる光の線）沿いに多数分布する神社仏閣や雨乞いの祭り等に見られるさまざまな「祈りのかたち」を題材とし、降水量が少ない風土で身近な山々に宿る龍神と密接に関わってきた塩田平の人々の暮らし等をストーリーにまとめたもので、中央地域と塩田地域の36の構成文化財で形成されている。



日本遺産における4つのストーリー  
（テーマと写真）



## キ. 特産品、工芸品、菓子・料理類

### (ア) 松茸

上田市内はアカマツ林が多く、特に上田市の南西に位置する塩田平一帯は全国有数の松茸の産地として知られる。シーズンを迎えると山の中腹に10数軒の「松茸小屋」が営業をはじめ。松茸の収穫時期は9月上旬から11月上旬ごろであり、9月中旬から10月下旬が旬とされる。その他施設栽培でえのきだけ、ぶなしめじ、なめこ、エリンギなどが生産される。



松茸

### (イ) ワイン用ぶどう

丸子地区塩川の陣場台地は、年間降水量が平均 900 mmと少なく、干害を受けやすい場所であったが、かつては盛んだった養蚕のための桑畑が広がっていた。昭和 40 年代からは桑畑に変わり薬用人参の栽培が行われてきたものの、連作障害や価格の低迷、農家の高齢化等により作付面積が減少し、平成に入ってから陣場台地の農地約 25ha のほとんどが遊休農地化した。このような中、世界水準の高級ワイン造りを目指して、長野県内



ワイン用ぶどう（貴房）

に自社栽培地を探していたメルシャン株式会社の求める気象条件等と合致しているとして、陣場台地が栽培候補地となった。地域の遊休荒廃地の解消と地域振興に鑑み、地権者の同意も得て事業導入を決定する。平成 14 年（2002）から長野県の地域づくり総合支援事業により農地造成や、排水路や調整池の整備などを実施し、平成 19 年度（2007）末に 21ha の造成が完了した。

(ウ) うえだみどり大根

戦後に中国からの引揚者が持ち帰った青大根と地大根とが自然交配して生まれた大根。11月上旬から11月下旬ごろを収穫時期とし、そのうち11月上旬から11月中旬が旬。身の中まで緑色の部分が多く、甘みだけではなく適度な辛味があるため、サラダなどにも楽しめる。水分が少ないことから、天ぷらにすることも可能である。



みどり大根

(エ) そば

おいしい水が生み出す信州のそば。上田の特徴は別名「田舎盛り」と呼ばれる盛りの多さにあり、溢れんばかりに盛られたざる蕎麦を楽しむことができる。また、近隣の東御市がくるみの産地であり、くるみだれも味わえる。そば屋は上田市の所々にあり盛んだが、周辺の自治体でも同様に盛んである。



そば

出典：<https://ueda-kanko.or.jp/gourmet-souvenirs/>

## コラム：映画のまち上田

市内では数多くの映画などのロケが行われており、大正12年(1923)から小津安二郎、黒澤明ほか名だたる監督が上田を舞台に名作を残しており、劇場公開映画だけでも110を超える作品のロケ地となっている。

その背景には、全国有数の少雨地帯でロケが安定してできること、東京から比較的近距離であること、夏冬の寒暖差が大きく四季がはっきりしていること、大人数のスタッフが宿泊できる温泉宿などがあったことが挙げられる。加えて、養蚕で栄えた時代には、市民の娯楽として多くの映画館



ロケの様子

が建てられ、地域の財界人たちのあいだでは、上田で撮影した映画を観たいという機運が高まった。彼らは東京の撮影所へ足を運び誘致に努め、上田ではロケ歓迎会を開くなどの活動を行った。

前述の気候や立地条件、そして、寺社建築や城郭、養蚕家屋や洋風建築、豊かな自然景観などが伝わり、数々の映画ロケが行われるようになった。そのような環境のなか、平成9年(1997)から「うえだ城下町映画祭」が開催され、毎年、上田ロケ映画と日本の名作映画を上映している。映画に関わる活動が弾みとなり、平成13年(2001)に「信州上田フィルムコミッション」が上田観光コンベンション協会(現在の(一社)信州上田観光協会)内に設置され、映像制作全般を対象にロケに関する手配やエキストラ募集などを行っている。その数は年間60件近くにのぼり、「映画のまち」上田のさらなる発展を支えている。フィルムコミッションの活動は、上田の地域資源や風土のプロモーションとなり、また市民の関心や地元関連産業(食事、宿泊、移動交通等)の参画による活性化にも結びついている。

### ロケで使用された文化財・関連スポット(抜粋)

文化財	主な作品	文化財	主な作品
安楽寺	淀川長治物語 神戸編 サイナラ	信州大学繊維学部	ゼロの焦点
生島足島神社	イカロスと息子	前山寺	男はつらいよ 寅次郎純情詩集
依水館	うさぎ追いし-山極勝三郎物語	宗咩寺	カノン
上田高等学校	姿三四郎	大輪寺	ロストメモリーズ
上田蚕種株式会社	犬神家の一族	大六のけやき	好夏2 ミントプロコトル
上田城跡	青天の霹靂	千曲公園	サムライフ
笠原工業株式会社	うさぎ追いし-山極勝三郎物語-	呈蓮寺	水で書かれた物語
北向観音堂	男はつらいよ	砥石・米山城跡	サマーウォーズ
旧宣教師館	黒い福音～国際線スチュワーデス殺人事件～	花屋ホテル	卓球温泉
小泉大日堂	EVER GREEN(RYO the SKYWALKER) MV	毘沙門堂	姿三四郎
向源寺	けんかえれじい	日吉神社	TRICK(トリック)(3) Episode2
鴻の巣	檀山節考	芳泉寺	姿三四郎
真田氏本城跡	真田丸	本陽寺	姿三四郎
塩田城跡	JX 日鉱日石エネルギーCM	前山塩野神社	過ぐる日のやまねこ
塩田水上神社	呪われたパワースポット	妙見寺	裸の大将(1)～放浪の虫が動き出したので～
信濃国分寺	犬神家の一族	文殊堂	弁護士・迫まり子の遺言作成ファイル(5) 告発
信濃国分寺跡	エキストラランド	山家神社周辺	過ぐる日のやまねこ
常楽寺	世直し公務員・ザ・公証人 10		